革命の旗

共産主義者同盟(革命の旗)
中央機関紙

創刊3号

1979.10.5

定価200円

発行人　北沢晋
発行所　赤流社
連絡先　TEL(03)407-3511
東京都世田谷区
千歳郵便局
私書箱4号

年間2500円(開封・送料共)
3000円(密封・送料共)

前進！前進！更なる前進へ！

10.8政治集会へ！

全国の共産主義者・先進的労働者、先進的農民・学生諸君！

日本共産主義運動の諸潮流の分化・再編に分け入り、革命的政治を貫ぬき、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド―全国単一党創建の大道を突き進め！

攻勢的党建設の新たな長征へ

共産主義者同盟(革命の旗)中央委員会政治局・声明

すべての同志諸君！

わが共産主義者同盟中央委員会と固く団結して一〇・八政治集会を圧倒的な結集で勝利し抜こう。

われわれの統合は、ブンドの分派の時代に決定的な終止符を打ち新たな攻勢的党建設の第一歩をふみだした。

共産主義者同盟(革命の旗)に寄せられた期待・希望は、機関紙「革命の旗」の圧倒的拡大、更には九・八、九・一六集会で号外が吸い込まれるように配布されたことに端的に示されている。

われわれは統合―革命の旗結成以降二ケ月余の活動のなかで、全国の共産主義者、革命的労働者、革命的農民・学生のなかに、マルクス・レーニン主義で武装された党の必要がいかに望まれているかをはっきりとつかみとり、われわれの党建設の今日的意義を一層深く確信した。

われわれの獲得した綱領草案・規約ならびに政治報告を基礎に党建設を更に力強く推し進めるためには、政治集会の開催と、その圧倒的成功をもって、より一層多くの同志・友人諸君にわが党の進路を鮮明に提起し、わが党と共に前進することを訴えていくことは、ぜひ必要である。われわれは、修正主義・現代修正主義・急進民主主義と一線を画し、社会主義と労働運動の結合をめざすマルクス・レーニン主義党の戦術・組織を打ち固めて、より一層前進することで応え切っていかねばならない。

〈革命の旗〉の下に団結せよ！

昨年三・二六三里塚闘争をその項点として一大高揚を迎えた日本階級闘争は、八〇年代階級闘争の革命的武装的発展のはじまりを告げている。

「暴力革命で日本帝国主義、つまりブルジョア階級独裁を打倒すると同時に、米帝国主義を追放し、プロレタリア階級独裁を樹立し、資本主義的生産関係を社会主義的生産関係にとってかえること」(綱領草案)に向けて、我々は怒濤の進撃を開始しなければならない。

一〇・八政治集会を突破口として全国的な攻勢的党建設に進撃せよ！

われわれは、統合をめぐる諸論戦のなかで多くのものを学んだ。とくにブンド総括をめぐっての問題で、清算主義と無総括主義では階級闘争の様々なあらわれを革命的に指導できないことを深く学んだ。急進民主主義を清算し、マルクス・レーニン主義の獲得を掲げているわれわれだけが、ブンドの革命的伝統を継承・発展させることができるのだ。ここに今日のわれわれの到達点がある。ここを打ち固めていかなければならない。六七年一〇・八闘争が、七〇年代の序曲をかなでたように、ブンドの栄光と党的敗北を真に深く総括しえたわれわれが、この日本階級闘争の画期的な日を記念して政治集会を開く意義がここにある。

わが同盟の個性とは何か

われわれは、革命の旗結成以降二ケ月余の活動を教訓化し、党の個性を鮮明化することに全力を注いでいかなければならない。

九・八右翼的「労戦統一」反対集会を導水路として始まった今秋期闘争は、八〇年代の党の全布陣を準備し、形成する闘いと結びつけて闘い抜かれなければならない。九・八集会を通じて明らかになった現在の日本階級闘争の特質は、右翼的「労戦統一」とそれにともなう先進的労働者の圧殺とレッドパージに反対する労働者階級、とりわけ先進的労働者の闘いが広範に存在し結合を求めており、革命党の指導を求めていることである。明らかに大勢は、人民大衆のなかに革命的精神の息吹きを形成しはじめ、資本主義のくびきからの解放を求める声が底流となっている。この底流を逆流させることなく、大胆に政治的決起を促がし、プロ・独・社会主義革命を準備する闘いと固く結合させるのである。この闘いを推進しうるのは、労働者階級であり、その前衛的先進的部分を結集した革命党だけである。この全体的な関係をつかみ切れない急進民主主義諸派は、八〇年代の党の布陣を形成しえずに、帝国主義の政策反対の民主主義闘争の戦闘化に自己の役割を限定化し、労働者階級を支配階級に高め上げる闘いを彼岸化し、常に動揺を深めざるをえない。

戦争と革命の要素の拡大

一〇・八政治集会を取りまく現在の国際情勢の特徴は、新たな戦争と革命の時代が始まりつつあるということである。具体的には、「社会主義国である中国、朝鮮民主主義人民共和国が大後方となり、属・変質させ、米帝国主義にとってかわって新たな世界支配を確立しようとして登場し、両者の間で覇権争奪戦、第三次世界再分割戦が始まり、激化している。そして二流の帝国主義国である西欧・日本は、資本主義の高度成長が破綻し、プロレタリア階級、勤労人民の反抗が増大し、ブルジョア階級独裁が危機に陥りつつある。これに加えてアジアの社会主義国を大後方とする民族解放闘争の前進によって帝国主義的権益をおびやかされ、またソ・米二超大国の帝国主義が世界再分割を強めていることから、一層体制的危機を深め、階級闘争を激化させ、社会主義革命に向けた革命情勢が端緒的にはじまりつつある」(綱領草案)つまり、ソ米の覇権争奪はより一層激化し、戦争の要素が増大する、と同時に、第三世界人民の民族解放民主主義革命が前進し、かくして二流帝国主義国において社会主義革命の広々とした舞台が形成されているということである。

ソ連社帝を後楯としたベトナムのカンボジア侵略・併呑に対するカンボジア人民の抗越抗ソ救国闘争をはじめとして、イラン革命の勝利、ニカラグア革命の勝利、ジンバブエ民族解放闘争がひきつづき発展していること、そして依然として国際階級闘争の機関車であることを示している。

また朝鮮人民の自主的平和統一に向けた闘いは前進し、朝鮮南半部人民がシンパラム(新しい風)として民主化運動の大高揚を戦取し、反米反日朴打倒闘争の発展を促し、もって朝鮮革命をアジアの民族解放闘争の最前線の一画へと押しあげている。

労働者階級に依拠した革命党へ

今秋期闘争全体の中でわれわれは、先進的戦闘的労働者の決起を促し、強め、しっかりとつかみ取り、真に労働者階級に依拠した革命党の盤石の基礎を形成・確立すべく、彼らを社会主義プロレタリアートへ高め鍛え、わが隊列に組織せねばならない。かかる闘いの結節環・核心をなすのが一〇・八政治集会の組織化の闘いである。

われわれは一〇・八政治集会をもって、〈戦争と革命〉の八〇年代への進撃の水路を切り拓き、攻勢的党建設―真の長征へ大胆に出撃する戦闘宣言を発しなければならない。然り、社会主義と労働運動の結合という歴史的大事業の遂行責任は、われわれの双肩にかかっている。

一九七五年のベトナム・ラオス・カンボジアの抗米救国闘争の勝利をはじめ、民族解放闘争がアジアアフリカ、ラテンアメリカ全域で拡大し、米帝国主義を先頭とした帝国主義の植民地体制を危機におとしいれつつある。米帝国主義はいまだ最大の帝国主義として崩壊しつつある覇権の維持・再編に向い、これに従属的に同盟しつつ、その枠内で勢力圏再分割をめざす西独、日本帝国主義が登場している。またソ連社会帝国主義は、『社会主義大家族論』『民族解放闘争支持』を掲げ、実際では東欧を一層従属国化し、社会主義国への干渉を強め、民族解放闘争を抑圧・隷

統合の意義を更に打ち固めよ！

このような史上三度目の戦争と革命の時代とりわけ、社会主義革命の革命的情勢の端緒的接近の時期にこそ、真に革命党のその内実が問い返され、階級闘争の鉄火の中で検証されざるをえない。いかに党を自称していようとも、そのサークル的本質をおおい隠すことはできず歴史のくず籠へ投げ捨てられるのは自明である。

このような激動の時代の中で打ちたてられた共産主義者同盟(革命の旗)の全真価を問うものとしてこの集会はある。

一〇・八政治集会の意義の第一は、ブンドの大分派時代を革命の

今号の内容

＊中央委員会政治局・声明……一～二面
＊第一回大会政治報告〈下〉……三～六面
＊総選挙に対するわが同盟の態度……七面
＊9・8労戦集会報告……〃
＊国際評論・非同盟会議が終わって……〃
＊9・16三里塚現地集会報告……八面
＊10・31狭山闘争へ決起せよ……〃
＊10月日朝人民連帯行動を組織しよう……〃

旗結成によって統合の時代へと転換させた成果を打ち固めることである。つまり、第一次、第二次ブンドの急進民主主義と反スタ・トロツキズムを正しく清算し、真にマルクス・レーニン主義に武装された第三次ブンドの創建が急務である。なぜなら、ブンドが日本共産主義運動の革命的伝統の継承・発展をかけ、現代修正主義に転落した日本共産党と訣別して以来、日本革命運動史における多くの教訓を労働者階級人民に実地に与えてきたからに他ならない。だからこそブンド総括は、より大胆に、今日の日本階級闘争の激成に立脚し、かつ労働者階級・勤労人民の共通の道標としておし広げていかなければならない。

何が人民の「共通の道標」か

われわれのブンド総括の基本はブンドの清算主義と無総括主義に反対して部分性に拘泥することなく、正反両面で正しく総括することにある。この観点の確立こそ、党建設の基本であり、それを出発点として、党の綱領・戦術・組織全体を貫く赤い糸としなければならない。

すなわち、プロレタリア階級独裁を要に、社会主義と労働運動を結合し、プロレタリア階級をすべてのブルジョア政党に対立する独自の政党に組織し、暴力革命でブルジョア国家権力を粉砕してプロレタリア階級独裁を実現し、資本主義生産関係を社会主義生産関係にとってかえること、ならびにプロ独を堅持した社会主義継続革命一国社会主義建設を承認するという観点を確立することである。

以上の思想路線を軸にして反ソ反米反覇権の国際人民闘争の大方向を支持・連帯し、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の政治路線との結合を図ることに力を注がなければならない。つまりソ連の社会帝国主義の本質を暴露し、ソ米の覇権争奪の激化とそれに対抗するアジアの社会主義国を大後方とした植民地・従属国人民の反ソ反米反覇権民族解放の闘いを支持・連帯し、これと日本の国家と社会の性質を正しい把握のもとに「プロレタリア階級の指導を通じ、貧農＝半プロレタリアと同盟し、中農と都市小ブルジョア階級を引きつけて、社会主義統一戦線を結成し、暴力革命で日本帝国主義を追放し、プロレタリア階級独裁を樹立し、社会主義革命を実行」（同）する闘いを結合し、推進するのである。

かかるわれわれの思想―政治路線は、すでに発表された綱領草案全体に貫かれ、深く刻みこまれている。

日本革命の政治路線の確立へ

第二の意義は、国際共産主義運動の大分化・再編に連動した日本共産主義運動の歴史的転換、なかんづく党派再編・分化の大激動のなかでわれわれの統合―共産主義者同盟（革命の旗）の結成の意義・立場を鮮明につき出すことである。マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成の歴史的第一歩を刻印するとともに、全国的なプロレタリア単一党をたたかいとる重要性をはっきりと打ちだすことである。

今日の日本共産主義運動は、世界的な激動と連動し、いよいよ深まる日帝の体制的危機とブルジョア階級独裁の反動化のつよまりによって、労働者階級・勤労人民の反抗がますます増大し、激化し、もって社会主義革命の革命的情勢の端緒的接近が始まりつつある。このなかで、日本革命の政治路線をめぐって、党派の分化・再編がより一層進行している。

現在、日帝は日米安保体制を強化し、米帝の後押しの下、米日韓三角軍事同盟の形成・確立をめざしている。さきの第七艦隊・在沖米軍の軍事演習「フォートレス・ゲイル」は、自衛隊の参加をもって日本海の制海権を掌握して北を強襲し、南から上陸するという朝鮮侵略反革命戦争を想定して行なわれた。この日帝の侵略反革命戦争の準備は、ブルジョア階級独裁を反動化し、天皇制を政治の前面におしだし、これと自衛隊の増強をはじめとした国家権力の肥大化・強化を結合し、労働者階級・勤労人民の反抗をおさえつけ、差別・分断支配を強化し、国独資の強化、及び一般消費税の導入によって搾取・収奪・抑圧を強め、蓄積構造の再編・確立を図らんとしている。それは当然にも労働者階級・勤労人民の闘い、階級闘争の激化を促さずにはおかない。

日帝は、軍事的支柱の強化と共に労働貴族どもを尻押しし、ブルジョア的労働者党の公然たる結成を含めた右翼的労戦統一を促進させ、その社会的支柱を強化し、先進的戦闘的労働者を排除・圧殺させ「生産の秩序」を防衛するための打ち固めをはかっているのである。

この日本帝国主義の体制的危機の広さと深さは、自らの権益擁護のために戦争準備を促進せずにはおかない。この戦争の要素の増大は当然にもすべての諸勢力の〈帝国主義と社会主義の分裂〉を不可避にしている。

日本共産主義運動の歴史的転換に分け入れ！

今日、日本の社会帝国主義は、反ソ連米擁帝派と反米連ソ擁帝派とに二極分解している。つまり帝国主義の側にすでに組み込まれ、忠勤に励み、労働者階級への敵対を一層強めているのだ。反ソ連米擁帝派の「毛沢東思想派」の部分は当然にも帝国主義の超過利潤の一部で買収された労働貴族に対する批判を欠落させ、右翼的労戦統一に反対せず、むしろ積極的に「反ソ」の一面で評価するという社会排外主義の危険性を強めている。

他方、すでに革マル派が反ソ連米擁帝の社会帝国主義に純化するなかで、革共同潮流の路線的動揺が激化・深化している。第四インターは社共をプロレタリア階級の当面の指導部と認め、議会主義の下に先進的労働者をおしとどめ、プロレタリア階級・勤労人民の隊列をプロレタリア階級独裁の準備を要として革命的方向に導き、打ち鍛えるのではなく、民主主義へ押しとどめ、ブルジョア階級独裁に追随させ、一方でソ連社会帝国主義の覇権主義の意図を実現することに客観的に手を借しているのである。そして中核派は、ソ米の覇権争奪の激化―第三次世界大戦の不可避性を見ず、日帝と米帝のあいだの矛盾の激化と「日帝の朝鮮侵略戦争」の危険性を強調し、実際は日帝の政策阻止のため、民主主義闘争の戦闘化のみを自己目的化して、日米安保体制粉砕闘争から召還し、ブルジョア階級の日米安保体制の再編・強化をテコとした戦争策動を許し、日帝の戦争と反動攻撃に対する首尾一貫した革命的反対者たりえない。この革共同諸潮流に対して、真の批判者たるブンド系諸分派は、マルクス・レーニン主義と急進民主主義とに大きく二分解している。その多くはいまだ急進民主主義の傾向にとどまっており、ブンドに対する無総括主義を基礎として、革共同のさまざまな傾向に一線を画することに成功していない。またブンドのマルクス・レーニン主義分派の一部にブンドに対する清算主義があり、かかる部分も同様である。

批判者への批判

この間、われわれの統合に対して、多くのブンド系の諸君からの「批判」が投げかけられたが、その「批判者」たちの「批判」そのものがブンド総括の要をつかんでいないというばかりではなく、この日本共産主義運動の再編・分化の中で自らの党建設の方法・観点を一切明らかにできないという根本的弱点を露呈している。このような中でわれわれは、革命的祖国敗北主義を貫き、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をめざし奮闘し、マルクス・レーニン主義を発展させる方向へと導き、祖国擁護主義の反ソあるいは反米民族解放をめざす修正主義や現代修正主義の傾向と闘争し、そして中間的に動揺を深める急進民主主義に対する批判を強めなければならない。さらに、われわれは、修正主義・現代修正主義―社会帝国主義を踏みしだき、ブンドのマルクス・レーニン主義分派の一つである紅旗派のブンドに対する清算主義、反スタ・トロツキズムの残滓に対する批判・論戦を更に推し進めると同時に、動揺する急進民主主義派、特にブンドの急進民主主義諸派をブンド総括、〈国家と革命〉〈戦争と革命〉をめぐる論戦の下に教育・改造し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成の条件を整え、戦取し、日本共産主義運動の中核、プロレタリア階級の指導者へと自己を鍛え、成長させねばならない。

かかる再編・分化にわれわれはブンド総括を要に攻勢的に立ち向かい、この中で自力更生を主軸に統合を副軸とする党建設を圧倒的に前進させ、主導権を握り、統合の第一段階の勝利を更に一層踏み固め、更に統合の第二段階をたぐりよせ、マルクス・レーニン主義の第三次ブンドを戦取しなければならない。

攻勢的党建設―新たな長征へ

第三の意義は、革命的党活動を確立し、職業革命家の組織を中核とし、工場細胞を基礎とした中央集権主義党建設の飛躍台とすることである。

われわれは綱領の転換から、戦術・組織の転換へ進んだ。この転換を徹底的に強め、押し広げ、貫かねばならない。これを今秋期闘争の中で、できるだけ広範な人民を組織し、先進的労働者、農民・学生に〈戦争と革命〉〈国家と革命〉の問題に対するマルクス・レーニン主義的見地を刻み込み、一層広く、深く修正主義・現代修正主義・急進民主主義との境界線を引ききり、もって〈社会主義と労働運動の結合〉を促し、強め、社会主義統一戦線の陣型を確固として構築せねばならない。

革命的労働者を獲得し、組織し労働者の多くの支持者を獲得し、工場を革命の砦としなければならない。それには「革命の旗」を高々と掲げ、プロレタリア階級独裁を要とした社会主義の宣伝・煽動を一層強化し、民主主義闘争、経済闘争に注ぎこみ、指導の中央集権化と党に対する責任の地方分散化を促し、工場細胞建設を推し進めなければならない。かくて一〇・八政治集会を、かかる党建設と固く結びつけ、結節点とし社会主義と労働運動の結合の新たな出発飛躍台としなければならない。つまり、かつてのブンドの「過程としての戦術」の根底的な批判をなし切り、戦術の転換、すなわち、「計画としての戦術」、正規の攻囲軍の建設としてたたかいとるということである。

マルクス・レーニン主義の第三次ブンドを

読者諸君、同志諸君！

わが中央委員会と固く団結し、日本共産主義運動の歴史的転換、日本階級闘争の指導の質の転換に対し、わが路線とプロレタリア階級人民の大胆な結合、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成の橋頭堡の構築、綱領の転換から戦術・組織の転換をかちとる革命的党活動の確立によって応え切り、攻勢的党建設に進撃せよ！

全力、総力で一〇・八政治集会を準備し、組織し、組織せよ！

全国の共産主義者・戦闘的労働者諸君！　戦闘的農民・学生諸君

一〇・八共産主義者同盟（革命の旗）大政治集会へ総結集せよ！

われわれと共に攻勢的党建設―新たな長征へ出撃せよ！

総選挙に対するわが同盟の態度

第三五回総選挙は、与野党の争点がないといわれている。これこそ、ブルジョア階級独裁下での選挙の本質なのである。そもそも公然たるブルジョア政党と隠然たるブルジョア政党の議席争いに絶対的な争点などありえない。まして、戦争と反動の挙国体制構築に向かっている現在にあってはなおさらである。

ブルジョア階級独裁下における議会制民主主義とは？　選挙とは何か？　それはまさしくブルジョア階級のどの部分が、一定の期間、人民を支配するかを決めるものである。と同時に、人民による投票という形式によって、国家統治に人民が参加しているような幻想を与え、ブルジョア階級とその国家権力に対する暴力革命、階級闘争とプロレタリア階級独裁の見地をくもらせようとするものである。

大平は、福田派、中曽根派、三木派などの自民党非主流派を抑え、自派（田中派も含む）の拡大をはかること、野党を抑え、自民党の安定多数を確立すること、このことをめざして解散―総選挙に打って出た。しかも大平は、選挙前に増税を主張した。（ここには増税―一般消費税導入を打ち出しても野党に勝てるという大平の自信がある）

戦争と反動の挙国体制の構築

総選挙をめぐる政治状況を利用して労働者階級人民の政治意識を高めよ

を、主要に、官僚・警察・軍隊の増強という方向で推し進めた福田に代って登場した大平は、それにつけ加えて、労働貴族のとりこみ、労働運動の右傾化―帝国主義の社会的支柱の強化という方向を主要に推進した。そして労働貴族どもの政治委員会である社会党や民社党をそれぞれ、より右に進ませた。こうしたことから、大平は選挙前に増税を打ち出すという大胆なことをやってのけたのである。労働者階級と人民は、野党に頼っていては、自らの解放も生活の安定もないことを、ここから学ばなければならない。

大平―野党・中道の本質

ところで、大平が計画している一般消費税とは何か？　それは、酒や石油、衣類等の生活必需品に莫大な税金が課され（現にかけられている税金がつり上げられ）、酒一本、石油一缶ごとに、買手の一人一人がその商品の値段ばかりでなく、その税金を支払わされるのである。これは最も不公平な税金である。そもそも、資本家階級が生産手段を所有し、そのため労働者階級が彼らの所得を自分の労働でつくり出す限りにおいて生きることを余儀なくされている資本主義の下では、一方にはギリギリの生活に釘付けされ、生活必需品の購入に収入の大半をあてざるをえない大多数の貧乏人（労働者と農民）がおり、他方にはその何百倍、何千倍もの所得を持ち、生活必需品に費す分をへともしない少数の金持（資本家階級とその伴食人）がいる。こういう下での一般消費税とは、貧乏人にはるかに重く税金を支払わせるものでしかありえない。しかも、この税金は、資本家階級―とくに独占資本―のためにより多くの利潤を保障し、彼らが労働者農民により苛酷な苦役を強制して、より多く搾取するための資金であり、更に戦争準備・軍備増強の資金源として打ち出されている。大平は、これを導入しようというのだ。更に選挙後、三里塚二期工事に着工せんとし、米帝との従属的同盟の下、ソ社帝との帝国主義世界大戦を準備し、朝鮮侵略反革命戦争のための軍備増強を更に進めんとしている。そして右翼的「労戦統一」をより加速化せんとしているのである。

社会党・共産党より露骨なブルジョア階級独裁のつっかい棒たる中道政党はどうであろうか？　新自由クラブは、そもそもブルジョア階級の傍流中の傍流（流通資本や中小資本）であり、ブルジョア階級の動揺期に、ついに自民党を飛び出したが、自民党に一定のおさまりがつくや、自民党回帰分子が脱党するなどガタガタである。また社民連も社会党の動揺期の協会派、反協会派の内輪もめがある程度おさまり党としての存在意義を失っている。この二党が公明・民社によりかかり、中道四党の選挙協力などと共闘路線を宣伝しつつ、その内実は、公明党、民社党による新自由クラブ（この一部分は、すでに自民党に食われてしまった）、社民連の基盤荒しなのである。ブルジョア政治とは、こういうものである。

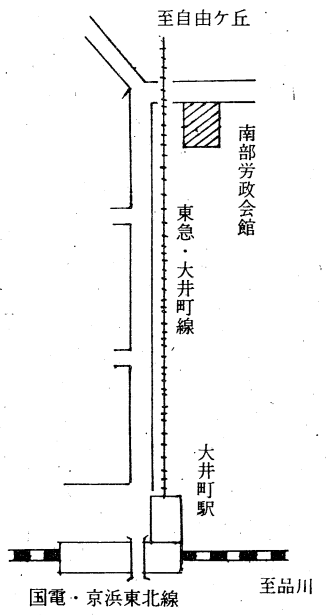
議会主義ではなくプロ独を

一体、議会で多数をとれば、賃金奴隷制が廃止されるだろうか？　あの機動隊や私服が、弾圧をやめるだろうか？　選挙に勝てば、世の中バラ色になるなどと社会党、共産党は、喧伝している。現代の諸悪の根源が、ブルジョア階級による生産手段と国家権力の領有にあることを確認し、生産手段をブルジョア階級から収奪し、社会の共有に移し、社会主義を、この日本に建設していくためにブルジョア階級の国家権力を人民の武装で粉砕し、プロレタリア階級独裁を樹立しよう。そのために、我が党と結合した労動運動つまり社会主義労働運動を創建していこう！

帝国主義と社会主義の分裂が本格的に始まっている。総選挙をめぐる政治状況を利用して、労働者階級と人民の政治意識を高め上げよ！

■ 10・8共産同大政治集会 ■

10月8日（月）
午後5時半
南部労政会館・講堂



共産主義者・同盟諸君！革命の旗第二回大会・政治報告

全国の共産主義者・先進的労働者諸君、先進的農民・学生諸君！政治報告第一部の発表（前号）にひき続き、第二、第三部を発表する。

第二部は第一に、十年間にわたる序曲戦を経て、第三次帝国主義戦争の第一段階に突入した史上三度目の戦争と革命の時代の全体的基本的特徴とその最新の局面の特質を示し、第二に、この戦争と革命の大激動に応じ〈戦争に備え、革命を促す〉見地を貫ぬくためにわが政治路線の下にプロレタリア階級を組織する緊要性・重大性を示し、第三に、以上から当面するわが同盟の任務がマルクス・レーニン主義の単一党創建を核心とし、プロレタリア階級に社会主義革命実現のために政治権力を闘いとる準備を全面的に整えさせることにあることを示している。（尚、紙面の都合上、第二部の半分、第三部の全文を省略せざるをえなかった。政治報告全文は、十月八日発売の『長征』参照のこと。）

目次

序章　旧共産同游撃派と旧共産同マルクス・レーニン主義派は、どこから来て何を闘い取ったか
——統合を戦取するに到った闘いの軌跡

第一部　ブンドを全面的に総括し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成へ
Ⅰ　ブンド総括の今日的意義と総括観点——清算主義と無総括主義に反対する——
Ⅱ　第一次ブンドの路線の総括
Ⅲ　第二次ブンドの路線と党的敗北の総括
Ⅳ　マルクス・レーニン主義、毛沢東思想のプロレタリア革命路線の獲得

第二部　国際—国内情勢とわが同盟の当面する任務
序　戦争と革命、国家と革命に対する態度を整え、「革命の旗」を掲げ、戦争と革命の八十年代へ進撃せよ
Ⅰ　帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代と今日の基調
Ⅱ　第三次帝国主義戦争の第一段階と革命の要素の増大、反ソ反米反覇権国際人民闘争の発展
Ⅲ　マルクス・レーニン主義と現代修正主義の分裂と闘争の拡大・発展
Ⅳ　日本帝国主義の体制的危機と歴史的地位
Ⅴ　帝国主義戦争と社会主義革命の本格的接近
Ⅵ　日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の政治路線と反ソ反米反覇権の国際人民闘争を結合し、「正規の攻囲」を組織せよ
Ⅶ　マルクス・レーニン主義の全国単一党創建の真の長征へ

第三部　党建設
Ⅰ　ブンドの分派から統合の時代を、自力更生と統合をもって更に推し進めよ
Ⅱ　日本共産主義運動の分化・再編に分け入り、大胆に党派論戦を組織せよ

第二部　国際—国内情勢とわが同盟の当面する任務

序章　戦争と革命、国家と革命に対する態度を整え、「革命の旗」を掲げ、戦争と革命の八十年代へ進撃せよ

七〇年前後から始まった史上三度目の戦争と革命の時代は、十年間にわたる序曲の変動を経て、今や文字通り戦争と革命の大動乱へと移行していく新たな局面を迎えている。この十年間、米ソ二超大国の全世界的な覇権争奪は激化の一途をたどり、七〇年代末の二年間は、ソ社帝の攻勢的な世界分割が、アフリカ、中東、インドシナでの一連の武力侵攻・転覆・干渉・併合の局地戦へと転化し、米帝がそれに対抗して西欧諸帝・日帝との同盟関係を再編・強化しつつ、新たな帝国主義戦争の準備を本格化するという、第三次帝国主義戦争の第一段階への移行を刻印した。と同時に、この十年間、アジアの社会主義国を大後方とする植民地従属諸国の民族解放闘争—民族民主革命闘争と第三世界諸国の広汎な反帝反植反覇権闘争はいよいよ勢いを増し、燃え上がり、七〇年代末の二年間は、民主カンボジア人民の抗越抗ソ救国闘争、イラン革命、ニカラグア革命、南部アフリカの解放闘争、そして朝鮮人民の自主的平和統一・南半部人民の民族民主闘争等、革命の要素が巨大な成長を遂げ、また第三世界諸国全般において反覇権・反支配主義の気運が昂まり、政治的自主、経済的自立、軍事的自衛の広範な反覇権統一戦線が、まさにベトナム、キューバの逆流に抗して、形成されつつあることを刻印した。

更にこの十年間、とくに西欧、日本における経済的、政治的危機が次第に発展し、深まり、七〇年代末の二年間は、ブルジョア階級の側での帝国主義戦争の準備と社会主義革命の鎮圧に向けた反動が強まり、プロレタリア階級の側での新旧修正主義のくびきをつき破って社会主義革命の準備に向かわんとする胎動の、死活をかけた闘いが始まりつつあることを刻印した。

こうして世界情勢は今、八〇年代に向かって戦争と革命の大激動へと動き出している。

我々は、この戦争と革命の大激動を能動的に迎えていく基礎として、日本プロレタリア階級の単一のマルクス・レーニン主義党創建の第一歩として共産同（革命の旗）の結成を闘いとった。我々は、日本プロレタリア階級をプロレタリア階級の世界軍の一部隊として組織し、社会主義国・被抑圧民族と固く団結し、反帝反社帝の赤旗を堅持して、当面の一時代の三つの革命の要素の成長・結合に奮闘・貢献し、反ソ反米反覇権の国際路線の下、ソ米の全世界的な覇権争奪と世界大戦に反対する国際人民闘争の発展の一翼を担いながら、世界革命の促進に貢献していかねばならない。なかんづく、我々は日本プロレタリア階級の革命的前衛として、〈戦争に備え、革命を促す〉という観点を当面する日本革命の具体的実践に結びつけ、米帝・日帝のアジアでの朝鮮侵略反革命戦争準備と対ソ帝国主義戦争準備に鋭く対峙しながら、自国帝国主義打倒をめざし闘い抜き、日帝打倒・米帝追放・プロレタリア階級独裁・社会主義革命をまっすぐめざして全力をあげ、奮闘していかなければならない。

史上三度目の戦争と革命の時代が、第三次帝国主義戦争の第一段階への移行として本格化し、現実のものとなっている今日の世界情勢において二流の帝国主義たる日帝もまた、不可避にその一環に転化し、米帝主導の下、帝国主義戦争の道を突き進んでいる。だがそれは同時に、日帝の経済的、政治的危機の醸成—体制的危機の深まりと相乗化しあっているのである。更に二流帝国主義として、ソ米覇権争奪の動向に左右されざるを得ないが故に、一層動揺的であり、それだけ人民闘争の爆発・発展をよびおこし、持続的に深め、広め、プロレタリア階級をその先頭へと押しあげている。こうして帝国主義戦争の接近とは同時に、社会主義革命の接近であり、革命的情勢—激動の、端緒が始まり、成長しつつあることをまざまざと示している。

こうした時代の到来は、戦後日本帝国主義の、米帝との従属的同盟の下における復活・成長・拡張が今やその不可避的な帰結——〈戦争と革命〉の一時代へと至りつつあり、寄生的な腐敗した資本主義という特徴と、死滅しつつある資本主義という歴史的地位がますます赤裸々となり、日本帝国主義の没落と社会主義革命の不可避性が現実のものとして日程にのぼりつつあることに他ならない。こうした情勢は、わが同盟に日本プロレタリア階級の単一のマルクス・レーニン主義党創建のために更に奮闘し、プロレタリア階級に社会主義革命実現のために政治権力を闘い取る準備を全面的に整えさせるという任務を課している。

当面する情勢は以下の特徴を示している。

第一にブルジョア階級が米帝との従属的同盟の下に世界再分割戦の一角を本格的に担い、日本資本主義の構造的再編の暴力的推進と帝国主義戦争の本格的・総合的準備に着手し、また社会主義革命と内乱の鎮圧のために、ブルジョア階級独裁の反動化と「挙国体制」づくりを全面的に整えさせるという任務を課している。そして、社会帝国主義潮流がますます階級協調と再編を強め、ブルジョア階級独裁の社会的支柱として、ブルジョア階級に忠勤を尽している。他方、労働者階級と被搾取勤労大衆の反抗と闘争が一層広がり、深まり、彼らの自覚と結束が高まっている。とりわけ、先進的労働者が政治闘争と経済闘争を結合して闘い、自己の階級闘争と人民闘争の先頭に立って、その主導力を強め、何よりも社会主義と結合し、労働者階級の革命的前衛党を建設することの緊要性を自覚し始めている。この希求に応えて、全国単一のマルクス・レーニン主義党創建の闘いがようやく、その苦汁に満ちた五年間の準備から真の長征へと向かう第一歩が闘い取られたこと。こうして全線にわたって、〈帝国主義と社会主義の分裂〉が始まり、従来の戦闘的な反帝反政府潮流・諸政治勢力の分化・再編が否応なく始まり、次第に激しい、深刻な、鋭いものとなり、社会主義革命の本格的な準備へと全線をつくりかえ、再編していく闘いが始まりつつある。一言でいえば、〈帝国主義戦争と社会主義革命〉の本格的接近という情勢が成長しつつあり、ブルジョア階級の帝国主義戦争の本格的準備とプロレタリア階級の社会主義革命の真剣な準備をめぐる死活をかけた闘いが全線にわたって拡がっていく、革命の本格的な準備期の性格が全て明らかとなりつつあり、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をめざす「正規の攻囲」の本格的組織化がはじまろうとしている。

我々は今、この情勢の歴史的節目をしっかりとつかみとり、この節目をめぐる闘いを、必らずや敵の要塞を奪取するプロレタリア階級の革命的攻撃の総力を発達させる、その確固たる礎を築き、最初の地歩として戦取し抜くために全力をあげて奮闘し抜かねばならない。そのためにこそ、我々は労働者階級の中で、マルクス・レーニン主義と新旧修正主義—社会帝国主義との仮借なき闘争を組織し、戦争と革命、国家と革命に対する態度を整え、プロレタリア階級独裁の思想で武装させ、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の旗の下に固く結束させていかねばならない。また、帝国主義戦争に、ブルジョア階級を打倒するプロレタリア階級の国内戦を対置する革命的祖国敗北主義と、アジアの社会主義国、民族解放闘争と固く結びつき、反ソ反米反覇権の国際人民闘争の大方向を結合する国際主義を打ち固め、社会主義革命をまっすぐにめざし、その勝利を闘い取るためにプロレタリア階級独裁を全ての方面にわたって準備することを全活動の内容としていかねばならない。社会帝国主義と仮借なく闘い、戦闘的左翼諸潮流、諸政治勢力の分化・再編に攻勢的・主導的に分け入り、先進的労働者をわが同盟の下に、単一のマルクス・レーニン主義党に組織し、統合するために休みなく奮闘せよ！　〈帝国主義戦争と社会主義革命の接近〉という今日の情勢があらゆる衝突を生起させている、社会生活の全ての分野、全ての面を社会主義革命のための一つ一つの水路としてとらえ尽し、労働者の中でのたゆみなき宣伝・煽動・組織化を強め、彼らの反抗のいくたの細流を社会主義のための巨大な革命的勢力、革命的奔流へとまとめあげるために全精力を傾注せよ！

10.8共産同（革命の旗）政治集会に寄せられた読者・友人からのアピール

空論的反スタ・トロツキズムとブンド総括の核心をつかんで

一港湾労働者

前略

ML派と游撃派が統合し、「革命の旗」を創刊したことに対して祝意を表します。

私は、未決時代、長期の刑に下獄してからも、第二次ブンドの党的敗北について、日本革命について、自分なりに総括しつつ勉強してきました。

先日、貴党の機関紙に掲載された綱領草案・政治報告などを読ませてもらい、やっと何か、自分の中でひっかかっていたものが、取れた思いがしました。

ブンド総括の核心とは何か？ということです。私自身、かつては、空論的な反スタ・トロツキズムを支持していました。しかし、ブンドの党的な敗北の深さにひきずられて、中々、その総括の核心を把み出せませんでした。

貴党の路線・主張には、現在全て一致するわけではありませんが、思想・政治路線の一致を第一として、三千五百万労働者階級の革命党建設に向けて、共に進んでいくために、今后とも同志的援助をお願いします。

「革命の旗」を真に全国政治新聞として発達させ、全ての工場・地域に革命的前衛の組織＝細胞を建設し、全ての工場・地域を革命の要塞へとかえていくために系統的努力を注ぎ込み、着実に前進せよ！　以上を基礎・眼目として、全ての人民闘争の指導者として登場し、全ての被搾取勤労大衆をわが党の周囲に、社会主義的プロレタリアートの周囲に結合させ、社会主義統一戦線を形成していく準備に着手せよ！　こうして戦争と革命の八〇年代に進撃する礎を築き、来たるべき大会戦――プルジョア階級独裁打倒に米帝追放を固く結合させた大会戦を、系統的・主導的に準備していかねばならない。

第一章　帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代と今日の基調（抄）

a　帝国主義と世界プロレタリア共産主義革命の時代の発展

第二次大戦後の一時期、米帝が西欧諸帝・日帝を従属的同盟に組みこみ、社会主義国の包囲と被抑圧民族に対する新植民地主義支配体制をもって築いた帝国主義陣営と、中国革命―東欧革命によって生み出された「社会主義陣営」と、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの民族解放闘争の抬頭として特徴づけられた世界情勢は、その後、五十年代～七十年代前後における激しい嵐と大分化・大再編を通じて劇的に変化し、七十年の前後から、史上三度目の戦争と革命の時代を到来させた。

この劇的変化をもたらしたものは、第一に、四九年中国革命の勝利、六一年キューバ革命の勝利、七五年インドシナ三国革命の勝利に代表される、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの被抑圧民族の革命闘争＝民族解放闘争の巨大な発展であり、世界革命の主力軍＝世界の革命的変化の原動力・機関車としての登場である。マルクス・レーニン主義党に代表されるプロレタリア階級が指導し、労農同盟を基礎とし、民族ブルジョア階級と連合・闘争しつつ、対外的には社会主義国を大後方として、帝国主義とそれに従属・結合した反動派の植民地支配を打ち破り、一掃する民族解放民主主義革命の勝利から、引き続き社会主義革命へ継続・発展・転化していく革命闘争を主導力として、総じて、「民族は解放を求め、国家は独立を求め、人民は革命を求める」歴史的潮流として発展してきた民族解放闘争こそ、その最大の革命的要素であったし、現在も依然として、世界革命と国際人民闘争の主力軍である。

第二に、第二次大戦後の永年にわたる米帝の世界支配が大きく動揺・後退し、一方では中国包囲が解体し、その新植民地体制はインドシナ三国を始めとして民族解放闘争の昂まりによって揺り動かされ、様々な環で次々と打ち破られ、他方では米帝、西欧帝、日帝の不均等発展の矛盾・経済対立と利権争奪・市場再分割競争と、資本の投下域・資源の獲保をめぐる角逐を強め、米帝の絶対的覇者から相対的強者への後退と、帝国主義相互間の対立を増大させ、こうして米帝を盟主とする戦後帝国主義陣営は、世界再分割戦と四分五裂の傾向を強めた。

第三に、世界最初の社会主義国ソ連で、フルシチョフ・ブレジネフの現代修正主義が、党と国家の大権を簒奪し、プロレタリア階級独裁の国家を変質させ、資本主義の復活を大々的に推し進めて、社会主義から官僚独占ブルジョア階級が支配する国家独占資本主義へと転化させ、東欧諸国をソ連に従属する国家資本主義へと変質させ、ソ連の半植民地従属国へとかえ、こうして社会帝国主義として登場した。ソ連社会帝国主義の歴史的登場は、かつての「社会主義陣営」を崩壊させた。更にソ連社会帝国主義は米帝にとってかわる新たな世界支配と被抑圧民族に対する支配権をめざして世界再分割戦にのりだし、一方では民族解放闘争の昂揚に乗じて、その背後から介入・侵透を推し進め、勢力圏拡大をはかり、他方では帝国主義相互間の対立の増大に割り込み、米帝との覇権争奪を強め、西欧諸帝・日帝を米帝から引きはがして自己の側へ引き寄せ、組み込うとする策動を強めた。

第四に、こうした現代修正主義の逆流に抗して、中国を始めとしたアジアの社会主義国では、プロレタリア階級独裁を堅持して、二つの道の階級闘争、社会主義継続革命を推し進め、資本主義の復活を防いで、社会主義建設を発展させ、またその闘いによって自国を帝国主義・社会帝国主義に対する革命的防壁として打ち固めながら「一国での革命の終局の勝利は、世界革命の勝利をもってはじめて達成することができる。」「社会主義国は、国際プロレタリア階級、被抑圧民族全体との団結を強めながら、世界革命の発展に貢献していかなければならない。」という観点の下、とくに現在の世界革命と国際人民闘争の主要な敵である米ソ二超大国とその覇権争奪に対決し、主力軍である第三世界の民族解放闘争との団結を強め、その利益の側に立ち、その大後方、促進者としての役割を果していくことを鮮明にしながら、反帝反社帝―反帝反植反覇権闘争の主柱として、自らを打ち固めた。

第二章　第三次帝国主義戦争の第一段階と革命の要素の増大、反ソ反米反覇権国際人民闘争の発展（略）

第三章　マルクス・レーニン主義と現代修正主義の分裂と闘争の拡大・発展（略）

第四章　日本帝国主義の体制的危機と歴史的地位（抄）

a　戦後日本帝国主義とブルジョア階級独裁・安保体制

戦後米帝占領軍による、革命的人民闘争抑圧と一連のブルジョア的諸改革によって、支配階級としての地位を打ち固めたブルジョア階級は、五〇年代初頭に、ブルジョア国家として独立すると共に、急速に自己の中央集権的国家機構を整備・強化し、強蓄積と独占資本主義の発展をおし進めた。この独立は米帝の支配を除去したものではなく、広汎に残存させ、日本のブルジョア階級独裁がそれに依存し、補完され、かつ一定支配され従属するものとしてあり、また日本の独占ブルジョア階級が米帝の後楯の下に帝国主義復活をおし進めるための保障となし、よってもって米帝のアジア戦略を補完するという体制＝日米安保体制としてあった。この日米安保体制下で、独占資本主義の急速な発展と金融寡頭制の確立、それに照応する上部構造の反動的整備をおし進め、労働運動における日和見主義・改良主義を育成し、小ブルジョア階級をひきつけ、こうして帝国主義復活を遂げていった。

この上に立って、戦後世界資本主義の再編成に際して遅れをとった日本資本主義は、この遅れを急速にとりもどしつつ、新たな世界資本主義体制に自らを組み込み、その中で自己の帝国主義的地位を確立する段階へと向かった。六〇年安保改定は、日米安保体制を、この日帝の復興を背景に、米帝の世界支配の下での米・西独・日の世界資本主義の再編成―市場競争と、アジアにおける米帝の中国包囲・新植民地主義体制の日帝による補完―日帝の対外膨張を骨格とする、従属的な帝国主義軍事同盟へと再編するものとなり、依存と補完、一定の支配と従属は、国内面での比重を縮小しつつ、米帝のアジア支配と日帝の対外拡張の面でのそれへ重心を移すものとなったのである。こうして貿易・資本の自由化―「開放経済体制」への移行と、六一～二年の恐慌、それに引き続く不況の中で、「国際競争力強化」の下に、資本の大規模な集中、鉄鋼・造船・自動車・電機等での技術革新と生産の集積・集中をおし進め、重化学工業を中心とする独占体制と金融寡頭制を飛躍的に強め、欧州市場への割り込みとアジアへの新植民地主義侵出―対外拡張を一途におし進めつつ、これらに照応して政治反動を一段と強めた。この過程で、農村の分解―農民の広汎な層を都市労働者と貧農＝半プロレタリアへと転化し、中農に対する独占の支配と収奪を強めた。こうして巨大なプロレタリア階級が一層大規模に形成されると同時に、その上層を系統的に買収して労働貴族を育成し、帝国主義労働運動を育成し、現代修正主義の社会帝国主義への転化を促し、ブルジョア階級独裁の社会的支柱を強化し、他方では広大な下層を相対的過剰人口として滞留せしめ、あらゆる形での差別・分断支配を強化した。

こうして日帝は、七〇年代の初頭には、イ、重化学工業を中心とする、生産と資本の大規模な集積・集中と経済生活全体を支配する巨大独占、ロ、六大グループの金融資本の金融寡頭制支配と、ブルジョア国家機関と直接に融合するに到るほどのその強固な掌握、ハ、資本輸出、ニ、国際独占体への発展と新植民地主義支配、世界の経済的再分割、ホ、沖縄再併合と釣魚台諸島をめぐる領土分割の開始、という〈五つの標識〉を明確に刻印するほどに、帝国主義としての全特徴を露わにし、その国際的地位を築き上げた。しかしこれは、米帝の後楯の下に、また米帝を補完しつつ、その枠内での勢力圏拡大として進行し、米帝に比して依然二流の帝国主義という、相互の地位と力の相互関係によって、日米安保体制の継続を不可欠としたものであった。他方、日米安保体制は、日本社会主義革命鎮圧のための、民族解放闘争や社会主義国に対する反革命的対抗のための、アジアにおける新植民地主義支配のための、そしてソ社帝に対抗し勢力圏を防衛し、世界再分割を推し進めるための、また以上における相互の関係を規定するものとして、公然たる帝国主義相互関係の体制たること―この性質に貫かれた依存と補完、一定の支配と従属たることをあからさまにした。

b　七十年代中期から始まった日本帝国主義の体制的危機の根底性と歴史的地位

だが、日帝の帝国主義としての全面確立と世界再分割の一角への公然たる転化は、同時にその危機と没落の歴史的傾向の開始に他ならず、社会主義革命の接近と社会主義革命に向けた胎動の始まりに他ならない。そしてこのことは、史上三度目の戦争と革命の時代の公然化と固く結びついた、七〇年代中期からの体制的危機の始まりとして現実のものとなった。

第一に、七三～五年の過剰生産恐慌とそれに引き続く構造的不況は、五〇年代後半～六〇年代初頭の蓄積を基礎にし、更に六〇年代中期以降の「開放経済体制」下の、世界市場再分割・

b　史上三度目の戦争と革命の時代の特徴

c　反帝反社帝を堅持し、三つの革命の要素を結合し、反ソ反米反覇権国際人民闘争を発展させ、戦争に備え、革命を促進せよ

こうした情勢の下にあっては、ますます反帝反社帝を堅持し、戦争に備え、革命をつかみ、促進することを基本観点として、各国の革命闘争を推進し、社会主義国を大後方として、三つの革命の要素の結合を強めることを、世界革命の発展を推し進める根幹にすえ、当面の国際人民闘争である反ソ反米反覇権闘争を推し進め、帝国主義戦争に反対する闘争を発展させ、もって戦争の要素の増大に対抗し、押しとどめながら、世界革命の発展を促し、有利に前進させていくという戦略指針を堅持し、貫いていかねばならない。ここで国際的人民闘争の大方向とは、二超大国間の矛盾と、二超大国と被抑圧民族の矛盾が主要なものとなり、二超大国の覇権争奪の戦争の要素が増大し、又、民族解放闘争―反帝反植反覇権闘争が発展・拡大し、かつ、それがとりわけ二超大国に対する闘争を軸に国際的結束を強め世界革命の主力軍となると同時に、二超大国・覇権主義・帝国主義に反対する国際人民闘争の主力軍となっているという比較的長期にわたる当面の時期にあって提起される大方向であり、それ故、反帝反社帝を堅持した各国の革命戦争―三つの革命の要素の結合―帝国主義世界大戦に備え、世界革命の発展を推し進めることに固く結びつき、それを有利に促進し、更にその構成要素となっていくものであり、こうして帝国主義・社会帝国主義、なかんずく、その主要なものたる二超大国を攻囲する闘いの一部分に他ならない。

（三面よりつづく）

労働者階級の最大の武器は団結であり、労働者の未来を闘い取る組織だ

一現場労働者

「革命の旗」創刊号、2号を読みました。

私は最初山谷におり日雇いをしていましたが、現在常傭としてある現場で働いています。山谷ではかって、現場闘争委員会があり、それこそ日雇いの権利と暴力手配師、ポリ公に対する闘いが生き生きと開花しており仲間うちの団結が固く結び合わされていました。

その意味でも「分裂から統合へ」向うことは労働者が求めており、重要なことです。共産同（革命の旗）結成はその一歩であり、十・八集会に期待し、その飛躍に注目しています。

そうした中で私たちが学んだことは、労働者階級の最大の武器は団結であり、労働者の組織であるということです。それも共同体的な組織や、一部の人たちが言っている思想信条を越えた組織ではなく、権力と真向から闘い、労働者の未来―プロ独・社会主義革命を闘いとる組織です。

……

この大きな転換期に、革命の旗の発言に注目し、期待する。

一都職労働者

いま多くの職場には、労働運動の名に値する闘いがほとんど皆無といっていい状態があります

とくに自治体職場では、一三〇万人の組合員を擁し、百パーセントに近い組織率を誇る自治労はあれども、職場の闘いは、当局と、これの代理人となった日和見主義、改良主義の指導部により完全に

（五面へつづく）

資本輸出と一体となった強蓄積の全帰結であり、その意味で戦後日本資本主義の発展の全帰結であり、まさしく日本資本主義の全構造に関わる、構造的矛盾・危機の露呈に他ならない。この構造的矛盾・危機の根底に横たわっているものこそ、生産手段が資本家階級によって独占されーなかんずく一握りの金融資本の下に膨大な生産手段が集積・集中されー、労働者階級が賃金奴隷として彼らに経済的に従属させられているという資本主義的生産様式の土台と、この下で賃労働の搾取を規定的目的・推進動機とする資本主義的生産の発展としてつくり出された生産の巨大な社会化と巨大な生産諸力とが激しく衝突していること、従ってまた、生産の社会化・全成果と巨大な生産力をわがものとして領有している金融資本の巨大な致富と、資本に対する賃労働の従属の深まり、労働者階級・被搾取勤労大衆の困窮という社会的不平等と隔たりが未曽有のものとなり、それと生産諸力の実現とが激しく衝突していること、更に社会的総生産の無政府性ー発展の不均等性と諸部門間の巨大な不均衡が、技術の改善と生産諸力の新たな発展の桎梏へと転化していること、このことに他ならない。こういうことが、日本資本主義の蓄積の基軸となり、生産の巨大な社会化と巨大な生産力と巨大な独占体を成立させ、独占利潤獲得の基礎となってきた、重化学工業部門における膨大な過剰生産と過剰資本の累積ー停滞と腐朽として集中的に現われているのだ。日本資本主義の構造的矛盾・危機とはこのことに他ならない

そして資本主義的生産関係の下では、それはただ、生産諸力の暴力的破壊をともなった、諸資本の没落と一握りの金融資本の下への生産と資本の一層の集中、彼らの更なる致富、小生産者の一層の零落、資本に対する賃労働の従属の一層の深まりと労働者階級の状態の相対的、絶対的悪化、社会的総生産の無政府性と発展の不均等ーより多くの資本を要する、より多くの独占利潤の取得をもたらす部門への資本の集中的投下と諸部門間の不均衡の一層の拡大、更に資本輸出への拍車と世界市場再分割の激化をもって、総じて矛盾を一層深刻化し激化させる方向でもって打開されていく以外にはありえない。

第二に、日本資本主義の構造的矛盾・危機のこのような打開の方向は、この危機が体制的世界史的なものである以上、巨大な国際的諸矛盾に突き当たり、それを一層激化させる方向に向かわざるをえない。民族解放闘争の高揚と、ソ社帝の攻勢的な世界再分割への侵出は、米帝の相対的後退をもたらし、戦後の国際的帝国主義体制そのものを揺さぶっている。民族解放闘争の昂揚と第三世界諸国の資源確保を通じた「新国際経済秩序」要求の昂まりは、日帝の新植民地支配・勢力圏を直接に脅かすと同時に、帝国主義間矛盾を激化させ、「持たざる帝国主義」西欧帝、日帝の危機を深めさせた。更にソ社帝の攻勢的な世界再分割と米ソ覇権争奪激化は、日帝をも世界再分割戦の死活をかけた一角へと一層つき動かしている。それに加えて帝国主義の不均等発展と対立の中で、六〇年代全期を通じて確立し、日帝の急速な発展・成長の基軸であった鉄鋼・造船・自動車・電機等の「戦略」産業が、市場そのものを狭められた大きな障壁にぶつかり、更に、列強間における蓄積構造ー産業構造転換と資源確保をめぐる激しい主導権争奪・角逐の中で、逆に巨大な跪弱性へと転化しているのだ。

こうして、日帝にとっては、自己の安定・発展・国際的地位の保障であった米帝との従属的同盟が、逆に不断の動揺・危機・制約の一条件へと転化し、また巨大な成長をとげた「戦略」産業そのものが、逆に構造的矛盾の打開の巨大な困難・障害へと転化してしまっている。しかもなお、日帝にとっては、民族解放闘争・反帝反植反覇権闘争の昂揚に対抗し、ソ社帝の攻勢的再分割戦に対抗して勢力圏を維持・拡大するには、米帝を後楯とせざるをえず、米帝への依拠と独自の国際競争力をつけねばならないという矛盾をかかえざるをえない。それ故、不断にソ米覇権争奪の動向に左右されながら、米帝の世界戦略の一角を担う仕方で、帝国主義戦争の準備に向かわざるをえないのである。かくて日帝は、日米安保体制を結び目にして、ソ米覇権争奪の矛盾、帝国主義国と被抑圧民族との間の矛盾、帝国主義国間矛盾を一挙にかかえこまざるをえず、これらの矛盾は、戦争と革命の時代の深まりの中で激化せざるをえず、ますます日本を戦争と革命の直接の一環へと転化していかざるをえない。

以上の二つの結びつきにこそ、今日の日帝の体制的危機の根底性とその歴史的地位がある。また、そこに革命的情勢の成長の不可避性があり、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命を戦取していく現実性が示されている。

この体制的危機は、七〇年中～後期の第一段階から、今第二段階へと突き進み始めている。

第五章　帝国主義戦争と社会主義革命の本格的接近(抄)

a　日本帝国主義の体制的危機と大平政権

七〇年代中期以来、日帝の体制的危機に直面して、金融独占ブルジョア階級は、日帝の進路と内外政策をめぐる様々な色合いと傾向における一連の抗争をくり広げつつ、二つの点に全力を傾注した。第一は、「当面政府が、不安定になろうとも、警察・官僚機構がしっかりし、労使関係が安定していれば日本の社会が危機に陥ることはないだろう」(七六・桜田発言)に示されるように、自己の支配の軍事的支柱たるブルジョア国家権力ー官僚的＝軍事的国家機関を更に固く握りしめ、強化肥大化し、労働貴族と社会帝国主義潮流を自己の支配の社会的支柱として更に育成再編し、ブルジョア階級に対する一層の協力と忠勤にひきつけ、労働運動の戦闘的爆発と人民闘争の発展を抑圧し、「減量経営」「減産減収増益」と、原子力開発等の、暴力的な全般的資本攻勢を推進することであった。第二は、七六年経団連の「防衛力整備に関する我々の見解」に示された、「雇用問題・所得問題などの国民経済との関連を常に追求し、自主技術の開発と国産化の推進を図り、防衛率の向上に資する方策をとる」と、「日米防衛協力」をめぐっての「国防問題をめぐる総合戦略」を確定することであった。前者が当面のさし迫った危機の乗り切りであるとすれば、後者は戦争と革命の時代の本格化における、内外にわたる困難を打開していく日帝の進路ーまさに八〇年代全般にわたるーの確定に関わるものであり、それ故、支配階級内での一連のジグザグと抗争をひきおこした。

すなわち、七六年福田は、経済的・政治的危機克服を軍事力の飛躍的強化・独自の核保有を前面に押し立て、これを国家的軸とする原子力・航空宇宙・電子工業中心の産業構造への急速な転換を推し進めることを掲げて登場した。それ故、中小資本や消費材部門、交通運輸部門の大規模な整理と集中、赤字国債の大量発行や一般消費税等大衆収奪の国家的実施と軍需投資ー軍需インフレの推進、国家資本・国家独占の飛躍的強化と官僚統制の導入をテコとした金融寡頭制ー国家独占資本主義の飛躍的強化、朝鮮南半部をその一環とした軍需産業の大々的育成と原子力開発の強行等を図らんとし、又中東・オーストラリア・アフリカ等へ石油・ウランの独自的確保に乗り出し、更には対ソ接近を強め、米帝からの独自的傾向を強めた。しかし、これは、一方で核燃料再処理や対ソ戦略をめぐって激しく米帝との矛盾を生起させ、他方、国内でも、ブルジョア階級内部の反発(一部独占から中小ブルジョア階級を含んで)を招き、一部労働貴族や小ブルジョア階級の危機感をつのらせ、又、人民闘争が鋭く激化する中で、更にそれに中国の反覇権外交と米帝の対ソ戦略による日中平和友好条約締結・米中国交樹立という国際関係の変化がつけ加わり、作用する中で破産し、大平政権へと移行した。

大平は「軍事力だけではなく、経済力・技術力・政治力などいろんな国力が緊張したバランスの中で、一つのチェーン(鎖)をつくり、国の安全が支えられていくものと思う。政治全体としては総合的安全保障戦略を頭において全体の政治運営をやる」という「総合安全保障戦略」を掲げ、その基軸に「日米安保体制の再編強化・自衛隊の質的強化による軍事的安全保障を根源とする」という、米帝の基本戦略との一致を据え、この「一つの戦略」を「二つの計画」(＝田園都市構想と家庭基盤の充実)や「民主・対話・連合」なる甘いオブラートでおおい包み、危機感を抱いた労働貴族、中・小ブルジョア階級を慰撫して全体的にひきつけ、金融独占ブルジョア階級全体の支持によって擁立された。このことでもって、支配階級は一連のジグザグと内部抗争に一定の決着をつけ、当面の日帝の進路と内外政策の基本を確定したと言いうる。

b　「総合安保戦略」の本質＝帝国主義戦争の総合的準備

c　帝国主義と社会主義革命の本格的接近＝戦争と革命の八十年代へ

だが、日帝のこの死活をかけた推進は、大平がどのような甘い言葉で飾ろうとも、それは矛盾の一層の尖鋭化と深化であり、以下の事態を不可避的に進行させずにはおかず、社会主義革命の情勢を一層近づけ、成長させないわけにはいかない。

すなわち、第一に、「減量合理化」に引き続いて、産業再編に結びついた全般的資本攻勢を一段と拡大し、一方での、首切り合理化・倒産解雇攻撃・大量の失業者の慢性化と、他方での、奴隷労働強化という資本専制・賃労働の従属・労働者階級の災禍の深まりであり、小生産者の暴力的な駆逐、資本集中の推進であり、財政危機と悪性インフレの泥沼化から一層大規模な大衆収奪の国家的実施への移行・更には経済の軍事化の準備であり、そうして労働者・被搾取勤労大衆には軍事的苦役を、独占資本には一層計画的な独占利潤の保障をもたらす、官僚組織の「計画と統制」の導入である。第二に、国内での「労働力削減」・大衆の貧困・農業の解体・「労働集約型」産業の廃棄と、第三世界への資本輸出増強ー国際分業再編は、日本資本主義の腐朽化と寄生性を著しく強め、プロレタリア階級と半プロレタリア階級の下層の大衆への重圧をいよいよ耐え難いものとすると同時に、日本資本主義をして第三世界諸国の体にまとわりつく寄生体＝その収奪・「貢物」によって命脈を確保するという性格をいよいよ強めずにはおかない。第三に、こうして、生産の社会化と生産の国際的集積の新段階の一層の推進が、生産手段の資本主義私有、取得の資本主義的私的性格との矛盾を一段と激化させ、独占と競争の矛盾を更に尖鋭化させ、物資の生産と分配の社会的規制の機構を準備し、もって社会主義のための物質的諸条件をいよいよ成熟させ、死滅しつつある資本主義＝プロレタリア階級の社会革命の直接の前夜としての全性格をいよいよ明らかにする。第四に、プロレタリア階級の組織的反抗と人民闘争を更に増大・拡大・激化させ、死活をかけた闘いとして尖鋭化せずにはおかず、又民族解放闘争の一層の昂揚と激化を招来せずにはおかない。そしてこの発展が、他ならぬトラストの圧迫と帝国主義国家への隷属をこそ巨大な障害・決定的桎梏として突き出し、こうしてブルジョア階級に対するプロレタリア階級を指導勢力とし、そのもとに被搾取大衆を率いた内乱と、帝国主義に対する被抑圧民族の民族解放戦争が不可分に結びつくような、体制的危機と矛盾を深めずにはおかない。第五に、帝国主義戦争の準備そのものが、国内の階級闘争と民族解放闘争の軍事的・武装的緊張を強め、その一切の真剣な継続を武装蜂起・革命戦争へと到らしめる客観的環境を醸成せしめずにはおかず、又この帝国主義戦争の準備が、ソ米覇権争奪・その戦争の要素の動向に左右されざるをえない動揺性とひび割れを通じて、労働者と被搾取大衆の政治舞台への登場と歴史的行動への端緒が噴出していく可能性を内在させずにはおかないのである。

いずれにせよ、文字通り戦争と革命の時代へと深まっていく八〇年代全般の情勢が、金融独占ブルジョア階級によって、「総合安保戦略」をもって告知され、その最初の一歩が始まったことーブルジョア階級の帝国主義戦争の本格的準備の第一歩と、プロレタリア階級の社会主義革命の真に真剣な準備の第一歩、この死活をかけた闘いが全般にわたって始まっていること、ここに現在の情勢の核心がある。

d　体制的危機の第二段階への移行と革命的昂揚の第二歩への準備ー現局面の性格

第六章　日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の政治路線と、反ソ反米反覇権の国際人民闘争を結合し、「正規の攻囲」を組織せよ！(抄)

a　戦争と革命に対する労働者階級の態度を整え、革命的祖国敗北主義を真に確立せよ

以上、日帝の戦争準備に対して、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命をまっすぐにめざして闘い、朝鮮人民の民族解放闘争・自主的平和統一、民主カンボジア人民の救国闘争と連帯し、第三世界の反帝反植反覇権闘争を主力軍とする反ソ反米反覇権の国際人民闘争の大方向と結合して闘わねばならない。

(四面よりつづく)

窒息させられているといって過言でない。この状態に対して、いかなる打開の道を示すのか、労働と闘争の中でどのようにして自治体労働者の階級的自覚を高めることができるのか？

他方で、これを打ち破るために多くの活動家が苦闘している。これらの人々は、(私を含めてだが)反スタ・トロツキズムの思想と運動のもとで育てられてきたことは否めない事実だ。そして心ある活動家は、多かれ少なかれ、この従来の活動のありかたが、大きな転換期にさしかかっていることを感じている。どのようにしてこの理由を説明し、進路をさし示すか？

私はこれらの点について革命の旗の発言に注目し、期待する。

八〇年代に向け、十・八政治集会に期待し、その成功を願う。

一生協労働者

今日の「出口なき不況」と呼ばれる、不況とインフレの同時進行＝資本主義体制の危機にあって、我々労働者はその立場を鋭く問われています。一方で資本の「安定成長」「減量経営」に完全に屈服した総評・民同の右翼的な労戦統一が進行している訳ですが、労働者はこうした労戦統一が資本主義を生きながらえさせることのほかに何ら意味を持っていないことをすでに知っています。そのことは「労働組合は必要」八十%としながら「組合活動に関心がない」五十五%(日教組調べ)と多くの労働者が労働運動に意義を認めながらも総評・民同の指導に明らかに失望していることからもはっきりと見てとることができます。

まさに、八〇年代労働運動が挙国一致体制を推進させるのかそれとも、社会主義を創出する運動を構築するのかを我々労働者につきつけられた課題であろうと考えます。

(六面へつづく)

こうして社会主義革命を実現し抜くことだけが、わが国の全人民を帝国主義戦争から脱出させ、その重圧から解放すると同時に、二超大国とその世界大戦に対峙する革命的防壁・砦を築き、アジアの社会主義国との緊密な同盟を築き、「自国の」侵略反革命・新植民地支配・他民族抑圧を真に廃絶し、民族解放闘争に真の支援をなしうるその大後方へと転化させることができる。これこそが、日本のプロレタリア階級にとって迫りつつある歴史的使命であり、この革命的自覚と決意をよびさますために奮闘しなければならない。

b　国家と革命に対する労働者階級の態度を整え、暴力革命・プロレタリア階級独裁を真に確立せよ

その上で、現在、我々は政治的攻撃の矛先を次の点に向けねばならない。第一は、現在の重大な攻防環である「労戦統一」において、労働貴族―両翼の社会帝国主義潮流を、ブルジョア階級独裁の社会的支柱・戦争準備の協力者としてあばき出し、彼らに対する闘争を全方面から強化し、彼らの制圧している陣地を奪い返し、プロ独準備の一環につくりかえていくことである。

第二は、日米安保体制の朝鮮侵略反革命戦争準備体制としての再編強化の暴露を強め、今や広大な規模で歴史的闘争へと進み出している朝鮮南半部人民の朴打倒・民主化闘争と結合して、ブルジョア階級独裁の打倒・米帝追放の煽動をおし広めることである。

第三は、被搾取勤労大衆・被差別大衆の、搾取と反動と差別強化に抗する闘いとの共同闘争において、官僚的＝軍事的国家機関の粉砕を、その第一の共通の利益・真の結合の前提条件として前面に押し出し、この煽動を強化していくことである。

c　新旧修正主義、社会帝国主義と闘い、社会主義労働運動の創出・発展へ闘う統一を促進せよ

第一に、我々は先進的労働者との間に、又真のプロレタリア大衆との間に強固な結びつきをつくり出し、彼らの一層の自覚と結束、戦闘的進出を促し、援けるために奮闘しなければならず、なかんずく、プロ独を要として労働貴族・社帝潮流の大連合―ブルジョア階級との融合と闘い、その革命的能力を鍛え上げるように、頑強な働きかけを強めねばならない。現下の「労戦統一」をめぐる一大攻防戦を、我々が彼らを社会主義革命へ準備させ、教育し、訓練していく戦場とし、我々のこの活動を飛躍的に高める舞台としなければならない。まさにその前進基地として、「革命の旗」を武器に、一つ一つの工場に共産主義前衛の分遣隊＝工場細胞を建設し、工場における革命的党活動をつくり出していかねばならない。社会主義労働運動をつくり出していくその全基礎を確立し、拡大していくことである。

第二に、労働者大衆を大胆に立ちあがらせ、職場からの階級的実力的決起を組織し、拡大・持続し、戦闘的労組・争議団の断固たる突出、実力闘争と基幹産業・官公労の戦闘的先進的労働者および下層未組織の労働者大衆の決起とを結びつけ、この力を基礎にして、社会帝国主義者を労働組合の指導部から追放し、労働者階級の階級闘争の一機関―社会主義革命のために労働者大衆を準備させ、教育していく一機関としての階級的労働組合運動の強化と発展のために闘わねばならない。

第三に、右翼的「労戦統一」と闘い、階級的労働組合運動の強化のために闘う、全ての共産主義的政派・先進的労働者の間での共同戦線をつくり出し、共同行動と共同の努力を形成しつつ、その中で、「社会主義をめざす労働運動」を口先のものに終わらせ、プロ独を彼岸化し、現在の闘いとの間に万里の長城を築くサンディカリズム的偏向・戦術的左翼反対派と粘り強く闘いマルクス・レーニン主義の革命党建設に結合させ、統合していく活動をおし広げねばならない。〈戦争と革命〉〈国家と革命〉をめぐる焦眉の政治態度を、この闘いの政治的背骨として力強くおし出し、政治的武装をおし広げていかねばならない。

d　プロレタリア階級を全ての人民闘争の指導者へと高めあげ、社会主義統一戦線を形成せよ

我々はそのためにも、次の三点をたえず強調しなければならない。①人民闘争の発展は、プロレタリア階級がブルジョア階級の打倒―なかんずく金融資本の支配をくつがえし、金融資本を収奪し、社会主義社会の基礎を創建することをめざして闘い、その眼目としての暴力革命によるブルジョア階級独裁の打倒＝プロレタリア階級独裁樹立をめざして闘い、これに結合して闘うことによってのみ、革命的な発展をとげることができること、ここにこそプロレタリア階級の指導的役割があり、そうしてこそ、全ての被搾取勤労大衆を、資本の軛とブルジョア国家の圧迫・帝国主義戦争の重圧からの解放へと導くことができること。他方では、人民闘争の指導的役割を通じて、全ての被搾取勤労大衆を、プロレタリア階級の革命的闘争に対する支持、結合へとかちえねばならない。

②今日の日帝の体制的危機の中で、ブルジョア階級は米帝に依存し、その独裁を補完され、一定従属することによって、自己の国際的地位を保障していること。このことが、一方では、日帝の反動化と戦争準備が日米安保体制によって支えられ、促進されていることに現われ、他方では、とくに小生産者への圧迫、搾取と収奪、その暴力的駆逐を一層重圧的なものとし、この重圧がプロレタリア階級と貧農の上にものしかかっていることに現われている。だからこそ、反米民族解放等の社会排外主義に結びついていく偏狭な民族主義と闘いつつ、日帝打倒と固く結びついた、日帝打倒の不可欠の政治的条件としての米帝追放の任務を掲げ、人民闘争を一層広大なものにし、とりわけ朝鮮人民の民族解放闘争との結合を強め、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命へ領導していかねばならない。

③他方では、プロレタリア階級は、まさに「狭い同職組合的枠にとじこもらず、社会生活の全ての現われと全ての活動舞台に、勤労被搾取大衆全体の指導者として登場する限りでのみ、革命的となり、社会主義的に行動することができる」。こうした萌芽は、すでに、労農団結・反差別共同闘争・地域共闘として生まれ始めている。我々は、このプロレタリア階級の闘争を更に発展させ、急進民主主義の幻想・空文句と闘いつつ、マルクス・レーニン主義党のプロレタリア階級に対する指導の強化を通じ、社会主義労働運動の断固たる創建を通じて、又このことに固く結合させることによって、この萌芽を社会主義統一戦線へと形成していかねばならない。まさにそうすることによって、日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命の闘いは幾百倍・幾万倍の力を発揮することが可能となるであろう。

第七章　マルクス・レーニン主義の全国単一党創建の真の長征へ（抄）

以上の革命的政治を真に実行し抜いていくために、我々は是非ともマルクス・レーニン主義で武装された全国単一党＝プロレタリア階級の単一の戦闘指令部を創建しなければならない。これこそ日本社会主義革命に勝利するプロレタリア階級独裁の準備の核心である。我々は、日共現代修正主義と分岐して以降二〇年にわたっているが、未だこの事業に勝利しえていない。それはつまるところ、マルクス・レーニン主義の原則と毛沢東思想を真に闘い取り、それに厳格に基礎づけられた日本革命の政治路線を真に確立しえてはいなかったからであり、急進民主主義と反スタ・トロツキズムにまといつかれ、従って、プロレタリア階級に依拠し抜く革命党建設の組織路線と革命的党活動・組織的作風を築き上げることができず、経済主義や戦闘団主義の、小サークル主義的セクト性をはびこらせてきたからであった。しかし、今や我々は長い苦しみの後にこの思想―政治路線も闘い取り、また組織路線を打ち立て、それと共に統合の事業の第一歩を戦取した。ここに真の胎動がある。と同時に、史上三度目の戦争と革命の時代―日帝の体制的危機と〈戦争と革命〉の接近という今日の現実そのものが、日本共産主義運動の諸潮流の分化・再編を促し、各々の性格を純化させ、歴史的転換点を形成している。それ故、我々は今、全力を上げて、この分化・再編に分け入り、マルクス・レーニン主義の全国単一党創建の大道を切り拓いていくために奪闘しなければならない。

第四インターは、戦争と革命の時代―日帝の体制的危機にあって、日共現代修正主義や社会党―協会派の公然たる尻押し部隊へと変質している。この「変質」をこそ、トロツキズム潮流の無力と反動性として暴露し、批判しなければならない。今日、彼らはベトナムのカンボジア侵略・併呑を賛美してやまず、そのことによって、ソ社帝の世界支配をめざす覇権主義を「世界革命」への道として唱和している。こうした態度をもって日帝の対外政治批判をくり返しつつ、日帝の体制的危機の促進を、「社共政権樹立」に託し、それを過渡的スローガンとして掲げている。こうして第四インターの左翼改良主義・日和見主義は、今では、日帝の方向転換＝日米安保体制から日ソ安保体制への転換―ソ・日・越・東南アジアの国際分業と「国有化による独占に対する下からの民主的規制」という、まごうことなき民族民主路線＝宮本一派・協会・こえ派の左からの補完物・尻押し部隊の道をひた走っているのだ。

こうした傾向と断固たる一線を画すことができず、依然としてトロツキズムとの折衷をもって「反スタ」を掲げ、急進民主主義の動揺をくりかえす革共同中核派、及びブンド系の急進民主主義潮流の動揺と混迷も又避けられない。この部分が今日の日本階級闘争の中で一定の戦闘性を保持しているとしても、日本革命を民族解放闘争・社会主義国の継続革命と有機的に結合したものとして闘い取ることはできないばかりか、プロ独の樹立と社会主義革命の遂行へとプロレタリア階級の階級闘争を確固として鍛え上げ導くことができず、体制的危機と帝国主義戦争の接近の中で、民主主義闘争の急進化・戦闘化にのみ腐心するのである。それに加えて日米安保体制に対する日和見主義―日米戦争論が拍車をかけている。こうした小ブルジョア的な危機と憤激・決意を「左翼的空文句」で粉飾している彼らは、一方での「突撃」による縮小再生産と他方での民主主義的大連合の間をたえず動揺しないではおかない。動揺・混迷・分解―前途はこれ以外にありえない。

他方、毛教条派―人民民主主義潮流の反ソ祖国擁護主義への転落がなだれを打って始まっている。民族民主路線という点では宮本一派と何ら変わることのないこの潮流は、ソ米覇権争奪激化と共に、「三つの世界論」を世界革命戦略にまつりあげ、教条化することによって、かつての反米反独占＝反米愛国から反ソ愛国＝反ソ連米擁帝へとなだれを打って転換した。彼らは、ソ社帝のアジア南下と日米安保体制を後楯とした日帝との帝国主義間抗争を民族矛盾と言いくるめ、支配階級との連合の下に、ブルジョア民族主義―社会排外主義の道をひた走っている。こうして彼らは、日帝を擁護し、ブルジョア階級独裁の国家権力に対する武装解除を広め、階級投降主義として立ち現われている。社会主義革命路線の清算をもってこうした潮流に合流している塩見一派や、「社会主義革命の準備」の名でもって、こうした潮流と融合し、欺いている立志社等は、その欺瞞性の故に罪悪も又大きいと言わなければならない。こうした潮流と断固たる闘争を進めることは緊切の義務となっている。

我々は以上の潮流との闘争を推し進めつつ、その対極に生み出され、形成されていかずにはおかない、マルクス・レーニン主義分派・グループとのより大きな統合を闘い取っていき、マルクス・レーニン主義の全国単一党創建を前進させていくために奮闘しなければならない。しかもこの事業は、ただ共産主義者だけのものではなく、全ての先進的労働者の共通の事業にしていかなければならない。

労働者階級の解放が労働者階級自身の事業であるからには、労働者階級の階級闘争は社会主義革命の勝利をめざして闘われねばならない。そのためには、マルクス・レーニン主義の革命党を自らつくりだすことが不可欠であること、その眼目がプロレタリア階級独裁にあることをくり返し訴えねばならない。なぜなら、ブルジョア階級は、自己の生産手段の独占を擁護し、労働者階級を賃金奴隷制のくびきにしばりつけておくために、強大な中央集権的国家機構を幾千幾万の糸というより綱でもって固く掌握し、自己の独裁を築いている。労働者階級がこれと闘い、打倒するには、そしてプロレタリア階級独裁をテコに社会主義革命と社会主義建設を遂行し抜くには、真に革命的な思想で統合され、最も政治的に訓練され、中央集権的組織性を鍛え上げた革命党なしにはありえないからである。又新旧修正主義―社会帝国主義、すなわちブルジョア的「労働者」党と真に闘争し、打倒するには、プロ独を眼目として根本的な思想的・政治的分裂を闘い取り、あらゆる方面で全面的な闘争を系統的に推し進めねばならず、それはマルクス・レーニン主義の革命党建設を基礎にしてのみ、首尾一貫して遂行しうるからである。そして現在ではとくに、戦争と革命、国家と革命に対する態度を整えることが不可欠である。こうして、全国の先進的労働者を強固に思想的に統合し、それを組織の物質的統一で打ち固め、一糸乱れぬ整然たる革命的活動をつくり出す時にこそ、プロレタリア階級は必勝不敗の勢力として立ち現われ、その歴史的使命を果すための、革命的攻撃の総力を発揮させることができるのである。

共産主義者同盟（革命の旗）
理論機関誌『長征』創刊号
十月八日発行・予価六〇〇円
――第一回大会決定報告集――
①綱領草案　②規約　③政治報告全文掲載（序・統合を戦取するに至った闘いの軌跡　第一部・ブンドを全面的に総括し、マルクス・レーニン主義の第三次ブンド結成へ　第二部・国際―国内情勢とわが同盟の当面する任務　第三部・党建設）

（五面よりつづく）

その意味において、長年にわたって分裂を繰り返してきたブントが今、綱領、組織的に統合を克ち取り、労働者階級の戦いにその指導性を発揮せんとすることを支持すると共に十・八政治集会が文字通り、労働者階級勤労人民の「単一の指令部」建設のその確かな一歩となるよう期待し、成功を願うものです。

十余年のブンドの分裂を根本から総括せんとする姿勢を高く評価する。

元ブンド系活動家

共産主義者同盟が、六九年七・六事件を契機に分裂して以降すでに十年余の月日がたっています。そして現在、この共産主義者同盟の不幸な十余年の大分裂の時代に終止符を打たんと、貴同盟が勇気ある行動に立ちあがったと聞き、心の底からわき上る喜びをおさえることができません。

時に貴同盟が、十年余にわたる試練、ブンドが身をもってかいくぐってきた大分裂とその時代を根本から総括せんとしている姿勢を高く評価するとともに一層の期待をよせるものです。

この十余年にブンドが払ったはかり知れない犠牲も、この敗北の教訓から得られるものに較べれば、問題にすることができないと思います。「敗けた軍隊ほど良く学ぶものである」、まさにその通りです。

かってブンドと共に闘い抜いた私も、貴同盟のブンドの再生真の労働者階級の前衛党建設に注目するとともに、この努力に期待します。

社会主義労働運動の創建をめざし、右翼的「労戦統一」粉砕！

労働組合運動の階級的戦闘的再生に向けて前進せよ！

去る九月八日都内で、「右翼的労戦統一反対！労働運動の戦闘的再生を目ざす労働者集会」が開催された。

本集会は今日、労働運動の最前線で闘い抜き労働運動の階級的再生、強化を目ざして奮闘している先進的労働者を中心として準備されてきたものであり、今日進行する労戦統一の右翼的、反労働者的本質を暴露し、それへの大衆的反撃の第一歩を印すものであった。そして現在、右翼的労戦統一の策動が一層の具体化をもって進行している中で、先進的労働者をはじめとする多くの労働者大衆が憤りをもち反発を強めている中で、この労戦統一策動を単に論議の段階として把えるのではなく、すでに今日「統一の環境づくり」として実質的に実体化されつつあるものとして把えきり、しかもそれへの反撃を労働組合運動の戦闘的・階級的再生の闘いとして明確な方向性を与えるものとして設定されたのである。

「開かれた総評」は何処へ

百名をこえる先進的労働者が結集する中、実行委からの右翼的労戦統一策動の具体的暴露と、それへの反撃の方途を社会主義を目ざす労働運動の創出と結びつけて闘い抜こうという基調が提起され、引き続いて教育社労組の秋山副委員長、全造船浦賀分会の闘う労働者からの本集会へのアピールが具体的な闘争報告を交えてなされた。

更に右翼的労戦統一とそれへの反撃の闘いが各闘争現場からの報告としてなされた。造船現場における造船重機労連＝JC労働運動の実態の暴露、全金本山闘争の現局面と、闘いの方向性、下層未組織労働者の実態と地域合同労組運動、全逓札幌大会総括と郵政マル生の実態が生々しい闘争現場からの報告によって、右翼的労戦統一が将来のことではなく、すでに実体として形成されつつあることが明らかにされたのである。

かつて総評内左派ブロックを形成した全国金属や公労協においてもJC型労戦統一に反撃するのではなく、むしろ追随し、屈服を強めていく現実が進行している。すなわち今では右翼的労戦統一に歯止めをかける総評内左派構造はすでに解体し、なだれを打っての労働戦線の右翼的再編が進行しているのである。

すでに今年の総評五十九回大会においては「参加と協調」の基調の下に今一歩、右翼的労戦統一に歩を進めるに至っている。この限りなく右派に「開かれた総評」の行きつく先こそは疑いもなくJC・同盟の帝国主義労働運動への屈服の道に他ならず、戦争協力への産業報国会運動の道に他ならないのである。

先進的労働組合活動家の任務とは何か

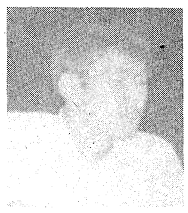
しかるに今日進行する暴力的「減量経営」―帝国主義戦争への熱望の高まりは不可避に階級矛盾を激成させ、かつての改良主義指導部の無力性、反動性を暴き出さずにはおかない。すなわち労働戦線の帝国主義的再編に抗し、労働組合運動の階級的強化をめざす闘いは改良主義指導部の組合統制をも食い破って拡大、浸透しつつある九・八集会の成功は、かかる先進的労働者の闘う気運を背景とするものであり、今日の労働運動を根底から揺さぶり、革命的に突き動かす勢力が着々と成長しつつあることを示しているのである。そして、今日進行する労働運動の産報化、帝国主義的再編に抗する道が他ならぬ社会主義労働運動の創建以外にないこと、この道が闘う労働者の側からの革命的回答に他ならないことが今一度強調されなければならない。

闘う労働者諸君！　今こそ、工場を革命の要塞に転ずべき革命的戦闘的行動が要求されている。我が党は、かかる革命的戦闘的行動の先頭に立つ。

共産主義者同盟（革命の旗）に結集せよ！

右翼的「労戦統一」に反対して労働組合運動の階級性・戦闘性を防衛し，社会主義労働運動を創建する第一歩が戦取された

教育社労組



秋山副委員長

七一年組合結成以来、教育社資本の暴力労政と対決し、既成労働運動の組織＝地区労の無力さ、闘いを弱めようとする現実や、司法の反動化、刑事弾圧の一層の強化を見てきました。その中で三多摩・都内五〇余の争議団の共闘＝争議団連絡会議を形成し、お互いに支えあいながら闘ってきました。そして〝資本よりも一日も長く闘う！〟を合言葉に地域の労働者の共闘組織＝支援共を軸に勝利まで闘う決意です。私たちの闘いと現在の労働運動の流れに「異議申し立て」る皆さんの闘いとは必ずや結びつくと考えます。

全造船浦賀分会

「造船不況」に名を借りた一大合理化攻撃の中で、住友資本は一九〇〇名の人員整理を提案してきました。これに対し二組（住重労組）は、自ら首切り基準案を出すとともに一七〇〇名なら承認するとまでいい、わたしたち浦賀分会にたいしては個人名をビラに書き資本に首切りを要請し、すべての職場で分会員への暴力的排除を資本の意を受け、否、積極的に行っているのが現実です。何故、こういう部分と何でいっしょになれるのか、ならなければいけないのか。

職場で少数派でも、争議団・地域共闘を形成することで闘い抜けます。現在、浦賀では支援共等の闘う労働者の団結で、指名解雇を出させていません。

大石　裕氏

（全造船石川島分会）

現在、造船産業においてはありとあらゆる合理化攻撃がしかけられ、人員削減一つとってみてもここ五年間に十万人以上が整理され今年に入ってからもすでに二～三万の首切りが行われている。これは生産の無政府性というか、膨大な設備投資―過剰資本が生み出したもので労働者には一切責任がないにもかかわらず、犠牲は労働者だけが受けている。こうしたことが資本の思い通りにできたのは、まさにJC・造船重機労連―労働者、労働組合の名で労働者の首切りを行う―の存在が大きくあずかっている。「労戦統一」はもはや論議をこえて進んでいる。同盟・JC解体へ共にガンバっていきたい。

青柳　充氏

（全金本山支部）

高度成長の中でストをやればそれなりに要求を獲得できるという事で、とくに全金は最左派として闘ってきたが、高度成長の終焉と共にその転換を強いられた。その中で労働組合の根本にふれる問題が見過ごされてきた結果、新たな時代に対応できなくなり、全金といえども、無力性を暴露せざるをえなくなった。まさに現在の「労戦統一」とは資本主義の危機に際して、資本主義を前提にすることで一致しており、同盟とは違うという総評の左翼性がもはや通用せず、指導性を喪失し、資本の攻撃に対決しえなくなった事を示している。われわれは、全金民同の除名・統制処分に抗して、本山闘争の闘う路線を堅持し、闘い抜いていきたい。

全金民同の闘争圧殺をはねのけ

前進する本山支部に支援・連帯を！

九・二四～二五本山闘争勝利全国総決起集会・現地闘争が、仙台現地で闘われた。二四日の全国集会には、全国から二百余名がかけつけ本山闘争に対する広範な戦闘的労働者の連帯・支援の意志を示した。

すでに衆知の様に、全金民同宮城地本は本年三、四月に支部員青柳氏に対する除名と三八名の闘う支部員に対し、権利停止処分にするという背後から資本　利する悪らつな敵対を行ってきた。この行為は「総評内最左派」を自認してきた全金民同の現在の姿を如実に物語るものである。集会では、八重樫委員長のあいさつ、由良書記長の基調報告において、本山支部は断固として全国金属の旗を掲げ、地域、全国の労働者に分け入り、連帯し闘い抜く旨の決意があきらかにされた。

翌日二五日は、激しい雨をついて、早朝より本山製作所門前において門前闘争を貫徹し、併せて、十時よりの仙台地裁における、熊谷さんの警察権力のデッチあげ起訴公判に対する傍聴を、全席をうめつくす結集で闘い抜き、闘争を終えた。

まさに本山支部労働者の闘いの未来は、命脈つきた民同―改良主義指導部を全金労働運動から追放し、右翼的労戦統一をひた走る日本の労働運動の戦闘的再生と階級的前進の道を断固として突き進むことにある。

東京合同労組

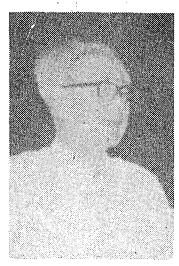
「合理化と賃上げのバーター」「本工主義」と呼ばれた民同労働運動の右翼的労戦統一への屈服と推進に対し、わたしたちは①下請・小零細等未組織労働者の工場分会結成、②反失業・反倒産闘争、③反差別闘争の運動方針こそ具体的実践的に反対していく内容ではないかと考えています。組織下層労働者と下層未組織労働者の階級的統一をかちとり、この力で闘い抜きましょう。

全逓労働者

昨年末からの反マル生闘争の大爆発こそ、逆に全逓民同―中央の反動性・反労働者性を暴露するものであった。あの闘いを準備し、支えたものこそ、中央本部の「中期路線」なる全逓版労使協調主義・合理化協力・実力闘争放棄への不信任であり、全逓の全郵政化に対する鋭い批判であった。こういった闘いこそ、右翼的「労戦統一」阻止の大きな力となりうるのではないか。

清水　一氏

（労働運動評論家）



現在の「労戦統一」とは資本主義の危機の労働者への転嫁、主体がブルジョアイデオロギーにくるめこまれ、労働組合の名に値しない労働組合にすべてが同化していくことを示している。つまり「労戦統一」が敵の武器に転化した。労働貴族どもが「統一」し、労働組合を管理機構・権力機構としていくものである。

総評五九回大会で富塚が「労戦統一しか道はない」とどう喝したが批判・疑問はおろかその検討の声すら出なかったのが現実であるこの現実を打ち破っていくためには、今一度、搾取の制度であり、支配の差別分断の武器となっている賃金制度を見直すことが必要であり、階級的労働運動のイロハからはじめるしかない。

民主カンボジア断固支持！

第六回非同盟首脳会議は、九月三日からハバナで九四ケ国代表が参加して開かれた。今回の非同盟会議の焦点は、①カンボジアの代表権問題、②エジプト・イスラエル条約問題、そして③第三世界の経済問題であった。

会議は前段から大きな論争点を形成した。今回の主催国がキューバということもあって、カンボジアの「代表権」は、ヘン・サムリン　かいらい政権をおすキューバ、ベトナム等によって二年間の凍結を余儀なくされた。これらのグループの主張は、民主カンボジアはカンボジア人民の全体を代表していない、という点にある。しかし、これまで非同盟会議の代表権は、ベトナム・ソ社帝のかいらい政権樹立まで、まぎれもなく民主カンボジア政権が保持していたことは明らかであり、今年四月の非同盟調整会議においても民主カンボジアの代表が正式に参加していたのである。それ故、ユーゴのチトー大統領は、激しくベトナムのカンボジア侵略・併呑を非難すると共に、非同盟運動の原則からの逸脱を批判した。

第三議題であった第三世界の経済発展と経済協力について各国とも石油輸出国機構（OPEC）諸国との相互援助を強調し、「新国際経済圏秩序の樹立」を訴えている。

反ソ反米反覇権か、親ソ反米か。

だがしかし、非同盟会議がこれらの諸国との経済的協力を緊密にし、被抑圧民族の解放と国家的独立に貢献しようとするためには、これまでの「外国の軍隊の一切の駐留に反対する」「反植民地主義」の立場を堅持し、これを反米・反ソ・反覇権の闘いとして進めてこそ真に闘い取れるのである。

今日の第六回非同盟首脳会議において見られたように、非同盟運動の転回軸は、この点にあったといえよう。戦後の民族解放闘争の世界史的前進のなかで、植民地・従属諸国が「独立」を闘い取ってきた。しかし、米等をはじめとした西側帝国主義は新植民地主義を行ない、これらの国々の経済的命脈を依然として確保し、かつソ社帝も今日では、その覇権主義を露わにし、拡張主義をおしすすめ米帝との世界再分割戦を激化させている。それ故、今日、第三世界諸国ではこれらの国々での矛盾・紛争が勃発する度に、必ずや米ソ両超大国が介入し、支配権を奪い取ろうとしているのが現状である。

民主カンボジア人民の抗越抗ソ救国闘争は、その意味でこうした転機にある非同盟運動の大きな礎である。これまで民族解放闘争と非同盟運動は強い相互関係にあった。しかし、ソ連社帝と現代修正主義潮流は、この関係を変質させようとし、「民族解放闘争支持」「反帝国際統一戦線」等を口にし逆に民族解放闘争を従属・利用し自国の拡張をおしすすめている。これとの闘い・境界線を画しながら、真に被抑圧民族の解放と革命をおしすすめるのか、それとも、「社会主義」を口にしつつも、他国の支配と従属に甘んじていくのかが鋭く問われるのが、今回の非同盟首脳会議の「対立」点であったといえる。

非同盟首脳会議の開催とともに様々なかたちでカンボジア問題の「解決」のための国際会議が提唱されてきた。その一例が米帝の意向を受けて日帝が提唱したものである。しかし、これは当然にも闘う民主カンボジア人民に拒絶されかつまたソ連・ベトナムの反対にあって、破産した。とくに日帝はシアヌークをもって「中立カンボジア」構想の根回しを行ない、米ソ覇権争奪の激化の中で、自らの権益圏の拡大とアジア諸国に対する政治的盟主としての位置を確保せんとした。しかし、この策動の破産は当然のことといえよう。

また他方、ソ社帝・ベトナム拡張主義者は、この構想を認めることは、自らが押し進めてきたこれまでの「覇権路線」を暴露され、その後退を意味するものであるが故に、必死の抵抗劇を国際舞台でみせたのである。

プロレタリア国際主義を貫け

民主カンボジア人民の命運を帝国主義者やソ社帝等大国が決定する権利はみじんも有していない。この間、歴史のいくたびかの経験が示すことは、被抑圧民族、かつ少数民族の自決と解放は大きな犠牲を強いられつつも、世界変革の主勢力として前進してきた。まさしく被抑圧民族は、自らの解放の闘いの中で、社会主義へとめざめ前進し、世界的規模で帝国主義勢力と袂をわかち、自主・自立の道を歩んできたのである。

われわれは、国際プロレタリアートの一部隊として、この被抑圧民族の闘いを支持・支援し、これと連帯し、共同の闘いを推し進めこの闘いと日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命を固く結びつけ、プロレタリア国際主義を貫かねばならない。

読者諸君、同志諸君！

プロレタリア国際主義の旗を掲げ、今秋の民主カンボジア人民支援の全世界人民の国際会議を勝利させるため、わが国で奮闘し、一月二日東京集会に圧倒的に結集せよ！

国際評論

転換点にたつ非同盟運動

―第6回非同盟首脳会議が終わって―

日朝人民連帯行動を強化し、十月行動を組織せよ！

南朝鮮の労働運動は、七七年三・一〇「労働者人権宣言」の発表を契機とし、本年四月来のYH貿易女子労働者の決死の闘いを頂点としながら広く深く燃えひろがり経済闘争から、問題の根本的解決をめざす政治闘争へと大きく発展している。

八・一一ソウル市警機動隊による新民党本部襲撃、金景淑（キム・ジョンシク）さん虐殺という朴―KCIAの苛酷な弾圧に抗し、南朝鮮人民は、「オモニ！　ここで（YH貿易）働く幼い労働者のために最後まで団結して、私達は必ず勝利します」（母への手紙から）という金景淑さんの闘いの遺志をうけつぎ、悲しみを力に変え、反米反日反朴闘争を一層力強く前進させている。

九月に入って、学生の決起が相次いでいる。九月一一日、ソウル大学において、数百名の学生が昼休み反政府集会を開き、デモ行進をし、機動隊と激しく衝突した。一八日には私立高麗大においても反政府集会が開かれ、維新体制撤廃、拘束学生釈放などを要求した「民主救国宣言文」が配られた。更に、二〇～二一日と二日連続でソウル大において反政府デモが闘い抜かれている。

他方、農民運動も労働者・学生の闘争に勇気づけられ、高揚が始まっている。安東の農民たちは、KCIAの弾圧に対して、ろう城闘争で闘い抜いた。

「オモニ……私達は必ず勝利します」

こうした中で朴「政権」は、一方では、野党新民党にゆさぶりをかけ、反主流派による金泳三総裁の総裁権はく奪を促し、民主勢力に対する分断・弾圧攻撃、更にはスパイ事件のデッチ上げによる労働運動、農民・学生運動への弾圧等を強化し、他方では、人民に追いつめられ、釈放劇の演出を強制され、八月一五日光復節に「政治犯」九一名を「刑執行停止処分」および「仮釈放」で釈放している。

かくして、現在の反米反日朴打倒闘争の前進は、野党新民党総裁金泳三の朴打倒路線への転換と連動し、労農同盟を基礎とした民族民主統一戦線結成の広い舞台、条件を作り出しているのだ。

南朝鮮人民の闘いの前進と韓国経済の破綻による朴体制の危機が深まる中でカーター訪韓・山下訪韓を軸にしながら、米日韓三角軍事同盟体制の実戦化が着々と進行している。

七月に発表された『防衛白書』では「ソ連の軍事力の脅威」を強調し、ソ連社帝との対決にむけた軍事力の増強を主張している。また在韓米軍撤退中止による「朝鮮半島の平和と安定の維持」が日帝の利益と合致すると述べられている。これは、日帝の軍事戦略の特質が南進を基本に、このためにソ連社帝に対抗して日本海の制海権を手中に掌握しきることにあることを示している。

この日帝の軍事戦略が米帝の強い圧力・支持の下に、打ち出されたことはいうまでもない。事実、八月の山下訪米＝山下・ブラウン山下・ブレジンスキー会談の中で米側が日米韓の三つの関係の安定こそ「アジアの安定の中核になる」と述べ、日帝の南進戦略に歓迎の意を示している。こうした流れの中で「米日韓三国安保」が具体化しつつある。十一月の日韓閣僚会議をもって、これは一層具体化されるだろう。

真に植民地・被抑圧民族と団結する道は何か。

我々は八・十一暴挙を糾弾し、十一月日韓閣僚会議と三角軍事同盟体制策動を粉砕せねばならない。そして体制的危機突破を安保体制の強化の下、朝鮮侵略反革命の強化と戦争の道に求める日帝を打倒し、米帝を追放し植民地・被抑圧民族の自決権を真に承認する社会主義日本の実現に向けて進撃せねばならない。

読者諸君・同志諸君！

ただちに日朝人民連帯行動を強め、十月行動を組織し、十一月への戦列を整えよ！

日朝人民連帯行動のスローガン

八・十一暴挙糾弾！　新民党本部襲撃―金景淑さん虐殺糾弾！
朴は全「政治犯」を即時釈放せよ！
十一月日韓閣僚会議粉砕！　日米韓三角軍事同盟策動粉砕！
朝鮮人民の自主的平和統一闘争支持！　朝鮮南半部人民の反米反日朴打倒の民族民主革命支持！
在日朝鮮人の民主的民族的権利のための闘争支持！
日米帝の朴を手先とした朝鮮侵略反革命・戦争策動粉砕！　日韓条約破棄！　在朝鮮南半部の日帝の資産無条件放棄！
日帝打倒・米帝追放・プロ独・社会主義革命！

10・31 狭山再審実現―石川氏奪還へ！

社会主義労働運動と部落解放運動を結合せよ！

七七年八・九最高裁による差別上告棄却の暴挙―渦巻く怒りの中で叩きつけた八・三〇再審請求以降二年余の闘いは、何より獄中一六ケ年不屈に闘う石川さんを先頭に、御両親、解放同盟に結集する部落大衆、労働者階級人民によってたゆまず推し進められてきている。そして「脅迫状」訂正日付の新事実という石川さんの無実を、権力による差別裁判を満天下に明らかにする新たな武器をえ、再審棄却＝獄死をたくらむ検察―高裁との対決へと突き進んでいる。この期にあって、われわれは、旧游撃派の起こした部落民僻称差別行為の自己批判―真に差別を許さず差別を見抜き、差別と闘いうる主体への変革―を闘いとった共産主義者同盟（革命の旗）の結成に刻み込み、社会主義労働運動と部落解放運動の結合という路線を、具体的な闘いを通じた部落大衆との反差別共同闘争として実現していかねばならない。その軸心に狭山差別裁判糾弾の闘いを据え、再審実現―石川さん奪還の確実な一翼を担い抜かねばならない。

五・二三総決起集会以降解放同盟は、七七日間にわたる部落解放全国大行動をはじめ、七・二一～二三全国青年集会（熊本）、七・二九千葉刑包囲糾弾、そして八・六全国一千余校の小・中・高校での同盟登校から八・九上告棄却二ケ年糾弾中央集会などの自立・自闘の闘いを組織してきている。そしてすでに、一〇・三一中央総決起集会に向けた取り組みを定め、その布陣を固めつつある。

この解放同盟の自立・自闘の闘いに固く連帯し、地域・職場・学園から圧倒的・大衆的決起を一〇・三一へと組織していかねばならない。そのための重要な武器、権力犯罪を暴き、最高裁の上告棄却〝決定〟を根底から突き崩すものこそ「脅迫状」訂正日付の真事実である。〝決定〟はいう。『所論（上告趣意）は、被告人の自白は、捜査官により強要されたものであり、また捜査官の強制、脅迫状誘導等によるもので任意にされたものではない、というのであるが、記録を調べてみても、捜査官による強要、強制、脅迫、誘導等が行われたと信ずるに足りる証跡を発見することができない』しかし、これはもはや半畳を入れずに読める代物ではない。この「作文」でしかない最高裁の『総合判断』なる詭弁を弄した検察―高裁の再審棄却を絶対に許してはならない。

自己批判を深め、狭山闘争の一翼を担いきれ！

体制的危機を深めていく中で、支配階級はブルジョア階級独裁をテコに、差別分断支配を強化し、労働者階級人民の中に様々な形での差別・融和攻撃をもちこみ、反動と戦争準備を強めている。

われわれは旧游撃派の自己批判を自らの思想・政治路線の確立の中にはっきりと位置付けることを通し、部落完全解放の闘いを全人民の課題として闘い抜き、プロレタリア階級の部落解放運動における圧倒的前進をかちとらなければならない。すなわち、プロレタリア階級の革命的統一をかちとり、社会主義と労働運動の結合を推し進め、その闘いと部落解放の闘いを固く結びつけていくことである。そのためには何よりも、解放同盟の自立・自闘の闘いに学び、それを支持し、連帯・共闘を強めると同時に、部落差別の根源たるブルジョア階級独裁を打倒し、資本主義生産関係を一掃することによってのみ、部落完全解放が可能であり、その条件が広々と形成されることを宣伝・煽動しなければならない。逆に、それはプロレタリア階級の階級的前進が差別・融和攻撃によって押しとどめられ、破壊されているが故に、プロレタリア階級は真に部落解放運動を自らの階級闘争の一環として闘い抜かねばならず、そうすることによってのみ、自らの解放を闘いとることができることと固く結びついている。

われわれは自らの自己批判の検証と実践に全力をあげると共に、職場・地域・学園から狭山闘争―部落解放の巨大な隊列をつくり出し、一〇・三一への総決起を訴え組織していかねばならない。

新事実を武器に、差別・無実・権力犯罪を暴露し、再審実現―石川奪還へ前進しよう。

「実力闘争を堅持し、空港を廃港に追い込む」戦列を打ち固めよ！

――9・16三里塚現地闘争報告

九月一六日、三里塚第一公園は五・二〇闘争を大きく上回る一万九千五百の全国から結集した闘う労働者、農民、被差別大衆、学生住民によって埋め尽された。

正午過ぎ、集会は、内田行動隊長の「本集会は、八〇年代の人民闘争の最先頭を担うものである」との開会宣言によって始まり、続いて主催者反対同盟を代表して、石橋副委員長からの主催者アピール、北原事務局長からの基調報告が行なわれた。

石橋副委員長は、「森山のいう『話し合い』は全くペテン的である。『話し合い』攻撃には一切応じない。断乎として実力闘争を堅持し、空港を廃港に追い込む」と発言し、北原事務局長からは、対話路線拒否、二期工事阻止、完全廃港こそ闘いの原則であること、「戦う農業」建設への更なる決意と支援要請、二期工事阻止に向けた今後の取り組み―一〇・二一、一二・一五現地集会への呼びかけ―が提起された。

続いて集会は、社帝革マルの組織破壊攻撃を一切はねのけ、この日一五〇名の隊列で参加した動労千葉や、北富士・日本原農民、部落解放同盟、全障連、闘う住民団体からの熱烈な連帯と決意の表明を受けた。最後に集会宣言、スローガンを全体で採択し、団結ガンバローの三唱をもって集会を終え岩山闘争記念館までの大デモンストレーションを展開した。

夕方からは、岩山地区を中心に同盟・支援二千人が参加して松明デモが行なわれた。二千の松明の炎が三里塚の夜空を赤々と照らし出し、闘いのシュプレヒコールが轟きわたり、それは、空港粉砕の絶対不屈の闘魂と津波のように押し寄せる労農人民の巨大な力を示すものであった。

この日の闘いは、再び三たび到来した三里塚闘争の正念場に対し二期工事阻止、農振策粉砕を掲げ「話し合い」攻撃をきっぱり拒否し、実力闘争で闘い抜く、反対同盟を先頭とした労農水学の能動的・攻勢的な戦闘布陣を一層打ち固めるものとして闘い抜かれた。

二万労農水学は，八〇年代の人民闘争の最先頭に立つ決意を打ち固めた！

〈戦う農業〉建設の闘いを社会主義労働運動と結合せよ

こうした闘いの前進は、〈実力闘争〉〈労農同盟〉〈戦う農業〉のその内実を一層深く広々とした首尾一貫したものへと押し上げ、発展させることを先進的労働者人民に問うている。このために、第一に帝国主義への忠勤に励み、人民闘争の圧殺者としての姿を露わにしている社会帝国主義との闘いを全線にわたって推し進めること。第二に、三里塚闘争の成果と闘いを社共政権＝「労農」政府樹立や、自党派の総選挙運動に、はたまた「反覇権反ファッショ」の名の下に〈大平部分連合〉の隠された支持勢力づくりに結びつける新手の修正主義・議会主義・改良主義を批判すること。第三に、実力闘争の戦術の急進化を「内乱」「人民戦争」として粉飾し、社会主義革命へ牽引する労働者階級の革命的能力の培養・組織化を放棄し、「民主主義のための先進闘士」だけに押しとどめてしまう急進民主主義潮流を批判・改造していかなければならない。

その要は、三里塚闘争一四年の成果と新たに開始された二期工事阻止・「戦う農業」建設の闘いをプロ独・社会主義革命の準備としっかりと結びつけることである。

汎ゆる苦難に打ち勝って闘いを堅持する三里塚農民に、先進的労働者は、社会主義労働運動の創建に全国農民運動を結合し抜き、社会主義をめざす労農同盟―統一戦線の形成へと進み出すことでもって、しっかりと応え、更に深く固い団結を培っていかねばならない。

【九・一六大会宣言】

十四年の修羅場をかいくぐってきた我ら反対同盟は、いくたびの正念場、いくたびの決戦を倍する総力をもって、必ずや空港粉砕を実行する。

敵の対話攻撃なる窮余の策略をふみやぶり、十四年間の闘いの蓄積に立脚し、十四年間の喜怒哀楽をひとつの石とし、呼吸を整え、怒涛のごとく現空港をのみつくす。

ここ数ケ月、反対同盟の葛藤は、我らの闘いにとって、新たな活力をうみだす希少な時であった。七転八起、我らは同じ轍を二度と踏まない。稲刈り半ばで、今日ここに結集した我らの全身に新たなる自信がある。

敷地内十五戸の硬骨漢は、開墾・開拓でふるったとんび鍬の柄をすげ替えて、己れの未来を開拓する。このとんび鍬の刃先のまえで、二期工事着工は風前のともしびである。

反対同盟、全国の人民が渾然一体となって、現空港を攻撃し抜くことが、二期工事を阻止し、三里塚空港を葬る最良の戦いである。

既成事実は覆せないとの通念を、我らが体内から取り払わなくて、我々は一体、何を、如何なる勝利を獲得することができるだろうか。

我ら反対同盟は、現空港に対する攻撃を更に強化する。連月連日、執拗に起こしていく決意を固めた。

全国の闘う人民との共同戦線で、飛行を阻止し、鉄条網をのりこえ、我らが大地に堂々と、我らが取香に、古込に、我らが駒井野に、天浪に大義をたててなだれこむ。

闘う心組みを固め、闘いの根をのびのびとのばし、第二、第三の戦う農業を確立し、反対同盟の生活・生産・闘争にわたる団結の質を高めていくことは、闘いの力を生みだす土壌である。我らは更に構想を練りあげ、農振策・成田用水攻撃を骨抜きにしていく。

敵を目前にまで追い詰め、今一歩のこの時に、何もたじろぐことをめざすのみである。動労千葉と固く連帯し、空港粉砕の志気を高め、完全勝利はない。

三里塚から渡る橋、三里塚へ渡る橋、その橋げたの基礎を固め、九・一六を突破口に連日連月の攻撃に打って出よう。

本大会に結集した総ての皆さんに以下四項目を提案し、全国的な討論を呼びかける。

一、騒音直下で闘う岩山地区反対同盟との連帯をより深めるため、家屋防音を始めとする具体的な作業を通し、闘いの場の確立をはかる。

二、戦う農業を同盟全域に広め権力の成田用水をはじめとする切り崩し策動をはねのける。

三、一年間の連続的飛行阻止闘争を通し既成事実の息の根をとめる。

四、政府中枢の空港対策を、具体的行動を通して、粉砕する。

以上をもって大会宣言とする。

一九七九年九月一六日

三里塚芝山連合空港反対同盟

【おわびと訂正】

前号（創刊二号・九月十日付）において、第四回全障連東京大会の記事中、「プロレタリア階級独裁を樹立し」を「ブルジョア階級独裁を樹立し」との誤植と、報告写真を、「6・3養護学校義務化阻止全国総決起集会」に誤まって掲載したことについておわびして訂正します。

全障連を先頭とする「障害者」自身の決起と団結、自立・解放の闘いを支持し、連帯を強めるとともに、「障害者」解放運動と社会主義・労働運動の結合に向け闘い抜いていきたい。

東京大会に二千人が結集